
転変世界のプラヴィタス

月草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転変世界のプラヴィタス

【Nコード】

N 8 4 4 8 Y

【作者名】

月草

【あらすじ】

夢も目標もない。頑張りたいことも特にない。空虚な日々を送ってきた少年――白上しろかみ 彩人あやとは今もその日々を送っていた。そしてこれからもそうやって生きていくつもりだった。そんな生き方をしていたから彼は何も得なかった。彼の人生は『白色』だった。ところがある冬の日、一人の少女との出会いが彼に『変化』をもたらす。少女は彩人とは似ているようで似ていなかった。白色の彩人とは違って、少女は白色に光沢を帯びた『銀色』をしていた。彼女は彩人の世界を変えた。それは彩人に白色な人生を彩ると同時に、

彼の世界を『異常』へと変えたのであった――

二章入りました。silver編は既にほぼ完成しているので、
順調に載せていけると思います。

序章

この世界は正常ではない。

ブラウイタス『異常』がところどころに存在している。

でもほとんどの人々はそれに気付くことはできない。気付いているのは一部の者達だけ。

俺もその一人だった。

だった、というのはもちろん過去の話。

これが俺の運命だったのかもしれない。

一度でも『異常』と接触してしまえば、それは知ってしまったという事。知ってしまった以上『異常』に溢れた世界からは抜け出すことができない。

中にはただ夢でも見ていたんじゃないか、といった風に見過ごすことができる者も居るかもしれない。けどそう簡単に見逃すことはできない。

世界が正常な部分で生きている人々が『異常』と交わってしまうのは、大部分がもう知らぬ間に関わってしまったのにまだそれに気付いていない人々。

俺はその中に含まれた。

元からそちら側の世界に関わる運命だった。最初から。一度だけ。

たった一度で自分のいる世界から違う世界へと変貌してしまう。

俺の場合は高校一年生の冬、雪が舞い散る銀世界で起こった。

それは俺を、俺の世界を変えてくれた彼女との出会いでもあった。この出来事さえなければ俺はまだ普通に世界の裏事情なんかには首を突っ込むことにはならなかったのかもしれない。

でも、俺はこちらの道を選んできました。

後戻りはできない。

後悔は無い。

この時の判断は間違っていたはずだ。そう信じなければならぬ。

俺の世界はここから変わってゆく。

いや、それは俺が知らないだけで、もしかしたらもつと前から始まっていたのかもしれない。『前』の俺だったらもしかしたら……。

だが『今』の俺にとってはこれが全ての始まり。

この物語は異常な世界へと誘われる転機の物語であると同時に、これからの物語を彩っていく上での最初の色となる。

銀色。

それは一面の雪の世界のように美しい彼女を連想させる色。

対して白色とは無の色。空虚で。夢くて。何の鮮やかさもない。

一見銀色とは似通っているようにも見えるが、一点において違いがある。

それは輝きがあるかないか。

一度は全てのものを失い、リセットされた白色の少年はその輝きに満ちた少女に魅せられる。そして彼女はその美しい銀色で彼の白いキャンバスを彩る。

これは白色の少年と銀色の少女の物語。

一章（１） 新代荘

新代荘。
にいしろやう

形は直方体。屋根はグリーン、外壁はベージュ色の塗装がされたコンクリート壁。というのはこの新代荘が建つてばかりの頃の事である。現在はそれから約二十年が経ってしまい、屋根も壁も色褪せている。住戸は全部で六つ。各住戸には八畳の部屋とトイレ、流し台、風呂が付いている。基本床はフローリングなのだが、中には畳の部屋もある。一階と二階に三部屋ずつ分かれており、それぞれの階の外に廊下がある。二階に上がるには、建物の横に設置された二階の廊下に繋がる階段を使えばよい。

周辺の土地利用は住宅がほとんどではあるが、他に荒地や田、畑、雑木林など。

交通の便があまりよろしくなくて、新築というわけでもないのですが、おすすめの物件とは言えないだろう。

だがここに住もうと思っても、それは不可能である。

ここは貸間としては使われていないのだ。

現在は家主を除いて三人の高校生が住んでいる。

ただし、居候。

彼らは六住戸ある中でそれぞれ一部屋ずつ使用している。

住居人の状況はこうだ。

この新代荘を道路に面している方から見て、一階の右端『〇〇一号室』は家主——新代にいしろ藍あいの部屋である。他住居人は、一階の中央『〇〇二号室』に新代にいしろ若葉わかば、一階の左端『〇〇三』号室に常磐とこね幸祐こうすけ、二階の右端『〇〇四号室』に白上しらかみ彩人あやこ、となっている。ちなみに階段は右側——『〇〇一号室』と『〇〇四号室』の付近にある。

午後八時。

新代荘の全員が『〇〇一号室』（新代藍の部屋）玄関に集合して

いた。

藍以外の三人とも玄関に立ち止まったままで部屋に上がらず靴をまだ履いている。

玄関はそれほど広くない。三人も居るとなると、とても窮屈だ。しかし、三人はそこから動かなかった。それにはちゃんとした理由がある。

新代荘では各住戸にキッチンはあるが、食事は藍の部屋で取ることが習慣になっている。調理は藍の担当。これはもう何年も続いていることだ。

朝食は毎日七時と決まっており、その時に藍がその日の夕食の間帯を皆に知らせておくという仕組み。またメニューを知らせることもしばしば。

稀に若葉と幸祐（彩人は部活動に参加していないため除く）は高校の部活で帰りが遅くなることがあるので、そういう場合はあらかじめ朝の時点で伝えておく。

今日の朝、晩御飯は鍋をやらうと伝えられていた。

そして予定通り彩人、若葉、幸祐の三人は藍の部屋を訪れた。

今日は鍋。

そう。鍋のはずだった……。

「ごめんね、鍋作れないわ」

この日はあらかじめ晩御飯が鍋であると伝えられていた。鍋は新代荘でちよつとりツチなメニューであり、三人は朝からずっと楽しみに夕食の時間が訪れるのを期待して待っていた。

だがこの一言が彼らの期待をぶち壊しにした。

期待をぶち壊しにした張本人——新代藍。背丈は女性の中でも高い方だろう。すらっとした体型でスタイルも悪くない。光が当たると青黒く見えるさらさらとした黒髪を後ろで紐を使って結んでいる。すっぴん（今日は午前中に鍋の材料の買出しのために化粧をしたが、午後からは化粧を落としている）であるのにも関わらず男性が目を引くこともある。ぴちぴちの二十代はとうに終えたというの

に、年齢に比べて若々しい。

また新代荘の家主であり、新代荘において子供三人の母親的な役割を担っている。

藍は両手を合わせてお腹を空かしている高校生たちに謝る。

他三名は哑然としていた。

「あのー、もう一回言ってほしいんだけど……？」

呆けたような口調をするのは白上彩人。髪の毛を染めているわけではない。が、生まれつきの茶色っぽい髪の色をしている。どこかしゃきつとしておらず、ふわふわというか、だらけているというかのような、そんな雰囲気を出している。一言で表せば、だらしない。聞き間違えたかと藍に再確認する。

「だーからー、作れないの」

藍はもう一度、現在の状況を端的に告げる。

「ええつと……じゃあ鍋……というか晩御飯はどうなるのよ？」

藍を問い詰めるように言ったのは新代若葉。やや丸顔気味でいてほがらかさがあり、笑顔の可愛いショートヘアの女の子。高校では水泳部に所属している。

「まあ無理ね」

バツサリと若葉の言葉を切り捨てる。

「無理つて……じゃあ今日の晩御飯は何になるの？」

若葉は代わりとなる他のメニューを訊いてみる。

「だからー、無理なの」

藍の言葉が段々とあきれ口調になってきた。

「まさか……。何も作れないってこと?!」

「その通りよ」

藍は期待を裏切られたあげく、空腹の三人を前にしてさらりと告げる。

「そんなぁ……お母さん」

若葉は希望の途切れと空腹でうなだれてしまった。

ここで未だに冷静に状況を見ていたもう一人の住人が中指で眼鏡

を鼻の上に持ち上げて話し出す。

「他の物が作れないというか……カップ麺とか買い置きは？」

冷静な口調で話すのは常磐幸祐。彩人とは正反对で見た目からしてすっかりしていそうで、頭もよさげに見える。見た目だけでなく、彼はその見た目通りの人物だ。高校では陸上部に所属し、勉強の上に運動もできると、彩人とは正反对である。

幸祐はいたって動じていないようで、別の策を探すために尋ねる。
「おお、その手がある」

彩人は内心で、ここはしっかりしてこういう時に頼りになる幸祐に任せるべきだと判断して、深く会話に割り込まないようにして言葉を繋げるだけだ。

「カップ麺は買い置きして……あるわね……」

そのような藍が希望の光に満ちた言葉を言った途端に、うなだれていた若葉がぱつと顔を上げる。

幸祐と彩人は胸を撫で下ろす。

「でも作れないわよ」

「……は？」

三人は同時にポカンとした顔になった。

（なんでカップ麺が作れないんだ？）

冷静さを保っていた幸祐でさえ驚いているようだった。

「そ、そう！ 材料はあるのよー」

右こぶしを左の手のひらに、ポン、とたたき藍が開き直った調子で言う。

「えっ！ 材料あるの？」

予想外だ、といったように彩人が応答する。

彩人だけでなく他の二人ともてつきり材料を買い忘れていたから鍋は作れないのだろうと思っていたのだが、どうやらそれが原因ではないらしい。

「……え？ ……というか藍さん？」

ここで幸祐が良い点を突く。

「なんで作れないんだ？」

幸祐が根本的な原因について尋ねる。

「それはですねー。ははは」

藍が笑って誤魔化そうとする。

「誤魔化さない」

幸祐はそれを許さない。

藍がむむっ、と眉間にしわを寄せる。

「それはそのー……」

言い出しにくそうにして顔を背けていたが、幸祐に詰め寄られてはどうしようもない。

「とうとう話す時が来てしまったのね……」

藍は真剣な趣を醸し出す。

「今まで隠し続けていた主人公の秘密をとうとう暴露するみたいな言い方はやめて」

そして藍は彼らに白状。

「お湯を沸かせないのだから当たり前だわね。おわかり？」

三人とも再びポカンとしていた。

幸祐が一度深呼吸をしてから続けた。

「えーと……、なぜ？」

「まあガスが止まっているのよ」

「まさかガス管が？」

「いえ、この冬の影響で凍ったとかではないわ。そうね……言い方が悪かったかしら。ガスがとまっている、ではなくて、ガスが止められた、ね」

「……止められた？」

「ガス代払ってなかったから止められちゃったの。ほらこの紙」

そう言っつてズボンのポケットから取り出した紙を三人の前に掲示する。

そこにはガスの差し止めのことがしつかりと書かれていた。

つまり今日一日中ガスを使うことができない、ということの意味

する。

「藍さんのせいかな！」

「ごめんねっ」

ねっ、と藍は可愛らしく言っただけなのだろうが、他三名にとってそれはただの挑発みたいなようなもので彼らの怒りを買うだけだった。

さしもの冷静沈着な幸祐も藍の態度に少し怒りを感じてきているようで、肩がプルプルと震えている。幸祐の頭で、プツンと何かが切れる音がして、ただならぬ気配が体を包み込む。

（あ、切れるかも）

幸祐が怒りを他人に見せることはめったにあることではない。そんな幸祐は藍にはよく怒りを見せる。今までに何度とか藍の挑発的な態度に踊らされてきている。幸祐が藍と言いつつ場合幸祐には勝ち目はないだろう。幸祐は藍をそれだけ苦手としている。

しかし幸祐も軽く挑発に惑わされないように、こみ上げる怒りを無理やり押さえ込んだ。

（おお、押さえ込んだか）

彩人はそんな風に幸祐に感心していた。

幸祐がふうー、と息を吐く。

あきれてしまったようで難しい顔になる。

とうとう黙りこくってしまった。

幸祐はこのまま藍と話を続けるといつかは絶対に取り乱してしまうと思うて一時退却する。

選手後退、常磐幸祐に代わりまして白上彩人。

「で、どうなの？これから。もしかして今日の夕食は断食？！」

彩人は幸祐の様子を見かねて代わりに言う。

このまま食わずじまいで今日を終えられない。

「責任はちゃんと取ってくれよ！。なんとかして」

しかし返事は……。

「まあ彩人も大胆ね。責任なんて。そういうことを言う年ごろなの

かしら」

藍は幸祐と話していた時と全く態度を変えず、反省の色が見えない。

彩人はこの手の挑発には引っかけからずただ、この人は相変わらず面倒くさい人だ、と思ったのだが口には出さないようにしている。

「まあ……そう……ね。ふーむ」

藍は目を閉じて考えた。

「あつ……。あつた」

「……おお!」「」

彼らはどうせありはしないと既に試合放棄のように諦めていたのが、答えは彼らの考えとは反していたので歓声をあげる。

藍の返事を聞いて、唸っていた幸祐の肩がピクツと動き、若葉と彩人も目を見開いて藍を凝視した。

「しばし待たれよ」

藍はそう言うて部屋の押入れの前へと向かう。

他三名は靴を脱ぎその後を追う。

辿り着いた先は押入れの前。

各部屋に一つずつある収納スペースだ。

そして襖を開けて押入れの中をガサガサと漁りだし、中の物を取り出していく。

押入れの中から色々な物が次々と湧いて出てくる。

わんさか、わんさか。

まるで温泉を掘り当てた時噴水みたいに出てくるお湯のようだ。

一体押入れにどれだけの物を詰め込んでいるんだ、という意見で

三人は一致しているだろう。

若葉がその一つを取り上げる。

「何これ……美容薬品」

それを見た幸祐も一つを取り上げる。

「こっちはダイエット関連だ」

彼らが手に取った以外にも湧き出てきた物はダイエット器具や美

容食品が多くを占めていた。

新事実だった。藍が三人に秘密にしていたことを暴露。

「藍さん。こんな物必要？」

彩人は美容薬品を持ちながら、押入れの下段に上半身をつっ込み四つん這い状態の藍に尋ねた。

すると藍がニヨキニヨキと後ろに下がってきて、彩人の方を見る。

「どういうことかしら？」

「いや、藍さんって綺麗な方じゃないかと思うし……。」

藍は高校生の彼らの倍はすでにある年齢にして、見た目は二十代と判断してしまいそうな若さである。

「だからこういう物は使う必要がないかなーって……」

「うれしいこと言ってくれるじゃない。でもね、それを保つにはやはり頼らざるを得ないの。わかる？ 最近はまたお肉が付いてきちゃったみたいだしねー」

お腹辺りのお肉を摘んで悲しげな顔をする。

「家でぐうたらしているからじゃ……」

「あ？ なんか言った？ 若葉」

「言ってない！ 言ってない！ ごめんなさい！ 何も言ってません！」

もう何か失礼な発言をしたということを白状していることがまるわかりであった。

「……まあいいわ。で、さっき彩人、うれしいこと言ってくれなかった？ 綺麗だって。でもね、それを 保つにはやはり頼らざるを得ないの。わかる？ 最近はまたお肉が付いてきちゃったみたいだしねー」

「そうですか……」

「いいこと言ったお礼に美顔スマイルを差し上げよう」

そう言って藍は彩人に向かってはにかんでみせる。

(……)

彩人は目を逸らした。決して面と向かったために恥ずかしくなっ

たわけではない。彼は呆れ顔だ。

「そこ。そつぽ向かない」

（何もうれしいことはありやしない。お礼だったらもう、こうちよつといいもの欲しいよな。今欲しい物つて言ったら特に……。）」

「やつぱりお小遣いってもらえませんかねー」

彩人は手をこねこねしながら駄目もとで頼んでみる。

彼らはお小遣を貰っていない、いや貰えないという表現の方が正しいだろう。新代荘の家計は少しも裕福ではない。現にガスが止められてしまっている。しかしこれは悪魔でも藍のミスが原因である。そのことを考慮しなくとも新代荘では藍が一人で彩人、若葉、幸祐の三人分の食費、はたまた学費までも支払っていることから察しが付く。これらの莫大な費用は全て貯蓄をすり減らしながら賄ってきた。つまり数年前までは莫大な貯蓄があったことになる。現在の藍の仕事はパートタイムのアルバイトだ。それほど給料が高いわけもなく、生活費として消えてゆく。

「彩人？ この世には不可能なことだってあるのよ。そしてこれが当てはまってしまうの。だからいい加減に諦めなさい。叶わぬ幻想は抱くものではないわ」

思っていた通りの返答だった。

「そうそうお小遣いちょうだい」

お小遣いというワードに引かれて若葉が話に乗っかる。

「さっき言ったことを聞いてなかったの？ そんな余裕はないわ」

「じゃあこれらはどういうことよ！」

ビシッ、と若葉が床一面に置かれた藍の私物を指差す。

「それは………」

藍は一瞬戸惑い。

「生活費よ！」

「どこがよ！ どう見たって嗜好品じゃない！」

「うっ………」

藍が押され気味で一步後ずさりする。このようなことは滅多にな

い。

「金が欲しかったら働きなさい」

「高校はバイト禁止なの!」

「つまり学校はバイトをしないで学業または部活動に熱心に勤めよと。どっかの誰かさんは勤めていないけど。すなわちあなた達には必要ないってことね」

「けちっ!」

藍は口笛を吹いている。

それに異議があつた彩人だが。

「でも藍さん、お……うつ!」

「それ以上言わない」

(いやまだ何も言つてないだろ!)

藍は彩人が話し出した途端に手が既に動いていた。

彩人は口ごもる。言葉が詰まっているのは藍の右手が口をわしづかみに押さえているからだ。

「ふんっ。何を言つたつて無駄よ」

(目つきが怖い!)

「わかつた?」

藍はさっきの目つきと一変。笑顔だ。ただし、その笑みも恐ろしさがあつた。

彩人は首を縦に振る。

「よろしい」

藍は手を放して彩人を解放する。

(口止めだ……)

彩人はこれ以上の発言は身の危険がありそうなので、黙りこくる。

藍は少しも意思を曲げなかった。

高校生には欲しいものだってたくさんあるだろう。学校の友達とどこかへ遊びに行きたいだろう。

しかし、実質、彼らはあまり文句を言える立場ではないのだ。彼らはあくまでも居候だから……。

「で、何か見つかった？」

何を言っても藍には利かないと分かっていた幸祐が話を本題に戻す。

冷静さを取り戻したようだ。

「ああそうだったわね。一応見つかったことには見つかったわ」

藍は再び押入れに潜り、探し物を中から取り出してきた。

「これよ」

藍が両手で抱えだしてきたもの――カセットコンロだった。

そのカセットコンロはけっこう古いもので周りの塗装が剥げており、実際に使ったことがあったかどうかも定かであった。

「こういう物があったとは……。これでキッチンのガスコンロの代用ができるな」

幸祐も一安心といった感じた。

「さあさっそく作ろう」

「ようやく飯かー」

「もうお腹ペコペコー」

そのまま彼らは部屋の中央に置かれた丸机に向かい腰を下ろす。
が。

「そういうわけにもいかないのよねー」

いい流れだったはずが、藍の言葉がせき止める。

「まだ何か？」

彼らはいい加減呆れていて、聞き返す言葉も適当になってきている。

その原因は藍自身にもあると言える。というか藍の言動にあると言ってもいい。

彼らの空腹は頂点に達しようとしていたため、頭には早く夕食にありつきたいという思考しかなかった。

「またもや同じ壁に阻まれた」

藍は困ったなー、と繭を纏めながら言った。

「まさか……」

最初に理解したのは幸祐だった。彩人と若葉は「何？　どういうこと？」ときよろきよろ幸祐と藍に目を移していた。

「無いのか……」

幸祐の言葉で取り残されていた二人もようやく理解する。

「その通り……」

室内の空気が重くなっていく。

「『ガス』が」

「それはどういう……」

「だからガスボンベが無いってことだよ。ガスボンベが無ければ力セットコンロが使えるわけが無いだろう？」

「そんな……」

「マジかよ……」

若葉はテーブルにうつ伏せになり、彩人は椅子に大きくもたれかかる。

「もういやー、お腹すいたー」

子供が母親に駄々をこねる時のように若葉が手足をジタバタさせる、が、エネルギー不足の為にすぐ力尽きてしまう。

「あなた達！　諦めたくはないわよね？」

「どうせできないじゃない！」

「まあ、どうにかする」

「どうやって？」

「……何とか」

さしもの藍も責任を感じているらしかった。先ほどのふざけた態度を改めて、やや真剣みになっている。

「そうねー何とかなると言えばなんとかかな……かな。それには一

人の尊い犠牲が必要になってしまっけど」

「どういこと？」

「それは――」

■ □ ■ □ ■

彩人は一度自分の部屋に戻り、ニット帽、マフラー、ジャケットのアイテムに、三枚着――一番下はシャツ、中間はスウェット、一番外側には黒のダウンジャケット――という完全装備身になり、右手に傘を持って藍の部屋に再び来ていた。

そして玄関で靴紐を縛りなおしている時に。

「頑張つてね。彩人……」

ハンカチで涙を拭う仕草をし、肩が震えている藍より（涙は流してはいない。そのかわりに笑いを堪えている）。

「いつてらっしやい」

かわいそうに、と若葉より。

「達者でな」

頑張つてこいよ、と幸祐より。

「……」

対する彩人は無言で立ち上がる。

「ああ、これお金ね」

さっきまで涙を拭う振りをしていた藍は手に持っていたものを彩人に差し出す。

そのまま、彩人は藍が手に持っていた物を手渡された。

彩人はドアノブに手を掛ける。

「くそう……なんで俺が……。じゃあ……行つてきます……」

その時の彩人の顔は実に悲しそうだった。

さあ扉の向こうは銀世界だ。

一章（２） 『今』の彼にとっての出会い

辺りは静寂に包まれている。

新代荘周辺は一戸建ての家が何軒か立地し、周囲には田んぼや畑もある。よって新代荘近辺ではそれらが何本もの細い道を網目状に作っている。

彩人はその網目を縫うように右へ曲がり、左へ曲がりを繰り返しながら進んでいく。

「はああ」

ため息混じりに白い息が出る。

（何で俺がこんなことを……。くそ……。藍さんめ……）

藍は解決案があると言い切った。

それは次のようなものである。

ガスコンロが押入れから発掘された後、ガスがないと期待を打ち砕くこととなった。

要するにガスボンベを買ってこい、ということだ。

ああついでにこのメモに追加の材料書いてあるからこれも買ってきてね、と藍から伝言もあり、他にも追加でお使いを頼まれていた（あの時勝っていればこんな事にはならなかったんだが……）

誰がこのお使いをするかを決めるのは、やはり最も公平である『はず』のじゃんけんであった。

結果はパーの人が一人、他三名がチョキ。すなわちパーの一人負けである。しかもこのじゃんけんは一度もあいこにならずに、一回で決着が着いた。

（一人負けってなんだよ）

彩人は不満が大ありだった。

（昨日だってゴミ出しのじゃんけんで一人負けしたし、その前だって……。もしかして、俺が何を出すのかを読まれているとでもいうのか……。一人負けの確率ってどれだけだっけ……。ああもう考え

ても無駄だ！ 数学は苦手なんだよ。まあとりあえずかなり低いのはわかる。それなのに連敗なんて読まれているとするしか言い訳がつかないじゃないか……）」

彩人は基本、面倒くさがり屋だ。お使いなど「めんどくせー」の一言で打ち返すはずなのだが、藍には簡単には逆らわない。いや、逆らえない。

（今回の場合はふざけている。なんなんだこれは。普通のお使いだったらこんなにも今、俺は苦しんでいないはずだ）

こんな悪条件が無ければの話だが。

「寒い……」

小声で呟いた。

体はガクガクと震えている。

ザク……ザク……。

聞こえるのはその音しかない。それほど静かだ。

「どんだけ降ってんだよ……」

雪は傘にどんどん降り積もって重量を増していく。そして傘が重くなってくるたびに傾けて雪を落とす。

「今年は異常じゃねえか？」

彩人は今この状況に至ったことに対する蟠りわたかまを、それを晴らす対象が見当たらないがために、つい何かに原因を押し付けようとしてしまう。

だが確かに彩人の言うことにも一理あると言ってもいいだろう。

悪条件の一つ。

二月十二日。

寒気さむけきわまる如月。

まさに冬。

つい三日前から分厚い雪雲が色見いろみ全体の空を覆っていて、天に青空を拝めることは出来ず、ただそこには灰色の空があるだけだった。色見とは、新代荘のある帆布地区はんぷに他の七つの地区も含め、全八区から構成される地域のことを指す。色見では例年雪は多少降るが、

今年の冬、特にこの時期は稀に見る大雪になると一月頃からテレビの天気予報でよく言っていた。

その予報は的中し、色見は銀世界と化している。

今日も雪は止む事なく朝からずっと降っており、どんどん積雪して町を白く満遍なく塗りつぶしていく。

しかも夕方から風が強くなっており、昼間で穏やかに降っていた雪は気分を悪くしたかのように表情を変えてしまつて吹雪になってしまっている。

彩人が目指す目的地はちょうど風上にあたり、強い冷気を纏った風は正面から襲う。

それを傘で防ぐように歩き続けているが、傘は上半身全体を守れるか守れないかの瀬戸際で、足には容赦なく吹雪が襲う。
凜とした冬の空気が彩人を苦しめる。

彩人は傘をやや前に傾けて吹雪を防ぎながら歩く。

ザク……ザク……。

降り積もったまだやわらかい雪が音を立てる。一步一步進むたびに足が埋まるため歩きづらい。
息を吐くたびに白い息が出る。

「寒い……」

彩人はこの銀世界に放り出されたのだった。

これが藍の言っていた『尊い犠牲』というものだった。

そしてもう一つの悪条件。

時間帯である。

ただいまの時刻は午後八時すぎ。

ただでさえ冬で日照時間が少ない上に、この時間帯ではいっそう気温が下がり、気温は氷点下に達していそうだ。

また、新代荘の最も近くにある（徒歩十分）スーパーマーケット『イトヤスシ』は、とくに閉店時間を迎えてしまっている。だから、彼の行き先はコンビニ（徒歩二十五分）へ変えざるを得なかった。

往復五十分。

それがこの極寒の中にいなければいけない時間である。

そこに新代荘の立地条件の悪さがにじみ出ていると言えよう。

（ショートカットすれば十五分で着けるか）

新代荘の周辺は細い路地が網目のようになっている。その中でも電灯がある所無い所とあつて、この時間だと電灯がない道は光がないに等しい。ただ中には民家から漏れるわずかな光が照らしている所や、機械だがどこか寂しいようにも見える自動販売機が闇の中にポツンと立っている所もあるが。

それを考えても普通は電灯のある道を行くのだが、その道を選ぶとどうしても遠回りになってしまう。往復一時間以上はその場合を考えた時の所要時間だ。電灯のない道を行けば四十分までに短縮できる。

だが彩人はさらなるルートを知っている。

実際、新代荘からコンビニまで直線距離で考えるとそれほど遠くはないのだ。コンビニと新代荘の間には荒地や田、畑、とくに雑木林などが障害物となっている。そのためそういったものを避けるために迂回して行ったときの所要時間が、先ほどの往復五十分ということになる。

しかし、必ずしも迂回する必要はない。道がないというわけではないからだ。ただし、その道は暗かったり、土手道だったり、しっかりとした整備が行き届いていない道だったりする。

それらをつまいこと利用すると大幅な時間短縮ができる。先に挙げたデメリットももちろんある。

それらの道を入々は好んで通ろうとは思わないだろう。まして知っている人もわずかしいないかも知れない。だから整備が疎かになる。

知る者は少ししかないという道を、彩人は知っていた。

なぜ知っているのかと言うと、『彩人は暇人だから』という解答が最もしっくりくる。

彩人はよくフラリとあてもなく出かけることがしょっちゅうある（それを散歩として彩人は趣味と主張する）のだ。

高校生だったらゲームセンターとかに行けばいいじゃないかと思うかもしれないが、彼はお小遣いを貰っていないのでただふらふらするしかない。行けるとしたら本屋で、立ち読みをするしかない。

それが習慣になって暇だから色々な場所へと赴くうちに新代荘周辺の土地は大方記憶してしまっている。

そのように空虚に消費されていく時間の源は彩人が高校の部活動に参加していないなどから出てくる。

彩人は単に言えば面倒くさがりや。

何かを積極的にやることもほとんどない。

ダラダラ、ゴロゴロと日々を過ごす。

それは充実した生活とは言えないと思うだろう。

だが彩人はそれでいいと思っている。

平和で楽に暮らしていれば何も困ることはない。

だから彩人はそんな風に生きる人なのだ。

「こつちか」

彩人は車一台の横幅より少し大きい道路から、ぼろぼろの廃屋や小屋の間の暗い細い道へ入っていく。その細道は車が通れるほどの道幅はない。この道をまっすぐ行くと雑木林にぶち当たる。

「懐中電灯つと」

ジャケットのポケットから懐中電灯を取り出す。

これがないと今から行こうとしている道は歩けない。なにせこれから明かり一つない真っ暗な道を通るのだから。

この辺りに民家は立っていない。

右手には傘、左手には懐中電灯。

どんどん進んでいくとやがて雑木林にぶつかる。

雑木林は人が通れるように道が一本あり、今歩いてきた方向とコンビニのある通りの方を繋いでいる。一応コンクリート舗装がしてあってガタガタ道ではないので足を踏み崩すこともない。

この道への入り口はどこへ繋がっているかを予測できないため、人は通ろうとしない。彩人以外にこの道を知っていて利用する人はいないかもしれない。

「不気味だな」

ここはさっきの住宅地の静けさとは違って、風に揺られた木々が互いに擦れ合う音、それにしたがって葉に降り積もった雪が落ちる音がある。

その音が恐怖を煽る。

住宅地を歩いていたら時よりも少し歩く速度が上がっていた。雪が歩くのを妨げているにもかかわらず。

五分足らずで雑木林を抜け出した。

雑木林の出口も入り口と同じように民家はない、だがもう少し進むと民家は建ち並んでいる。

民家が建っているがこの道にまだ電灯はない。

だから彩人はまだ懐中電灯で行く先を照らし続ける。

懐中電灯の明かりともう一つ、この道には自動販売機の明かりがある。

この時間帯車道は電灯の付いた電柱が等間隔に連なっている。しかし路地裏は電灯がなく自動販売機のライトだけが照らしていた。

「何かこう……人がいないところにある自動販売機って……」

まるで孤独を感じているかのよう――

などという機械に自分と同じ何かを感じてしまった彩人はその自動販売機に横を通り過ぎる。

彩人にも暗く細い道は孤独感を感じさせる。

細道の遠くの先は明るくなっている。それはこの道をまっすぐ行くと車道に出るからだ。

（そういえばガスボンベってコンビニで見かけたことあったか？

売ってなかったら……とんだ無駄足になるな。まあ……あるだろう。そうじゃないと俺は恵まれない！）

そんなことを考えているとようやく、ちゃんと白線の引いてある

二車線道路に出た。

この時間でも車は数台走っている。さすがに車道であるので、街灯から放たれるオレンジ色の光が道路全体を照らしている。

（よっしゃあ！ さあ目的地は目の前だ！）

彩人はやる気を高める、が……。

「はあつくしよっんっ！」

鼻を嚙った。



コンビニの店員の「ありがとうございましたー」という挨拶を聞いて店内を出る。

店から出た瞬間、着込んでいるのに服の隙間を縫うように冷気が入り込んできた。

「うつ……」

体が急に固まる。

「はああ」

ため息は空気中で白い息となりしだいに消える。

「萎える」

店内の空間がどれほど冷気からの回避エリアとなっていたかと思わせられる。

彩人は行きに味わった凍てつく町をまた歩かなければならない。

そう思うと帰る気力が削がれる。

コンビニでつい長居したくなって店内を無駄にグルグルと回っていた。店内の暖房は格別の癒しだった。だから先ほどまでの苦闘を忘れかけていたのかもしれない。しかも暖かい所から急に寒い所に出たので冷気がいつそう冷たく感じていた。

あまりの寒さに体を動かす気が湧かなかったが、店の前でいつまでもぐずぐずしているより歩いたほうが体を温められると思い歩き始める。

（この仕事の報酬ぐらいあってもいいよな）

彩人は上着のポケットからコンビニで買った缶入りのコーンスープを取り出す。藍はご褒美の分までお金を渡したわけではないが、頼まれたものを買ってもお金が余るとわかった彼は勝手に商品を追加した。もちろんこれは新代荘の皆には秘密である。

すぐに呑んで缶を空にしてしまうのはもったいないので、手を温めるために吞まずにとっておく。

（新代荘に着くまでに吞んじゃえばれないし）

幸いなことで、行きよりかは雪の降りが弱まり、風も止んでいた。傘を差さなくてもある程度大丈夫そうである。

だから彩人は差しているよりかは畳んでしまった方が楽なので傘を閉じる。

また行きと同じ細道へと入っていく。

もちろん帰りも同じ裏道を使って時間を短縮する。

「それにしてもよかったな！。注文の品は全品購入完了。売ってないというオチがなくてよかったあ」

彩人は右手に買った物が入っている袋を持ちながら歩み進む。

「帰ったら飯の前に風呂入ろうかな」

彩人はかなり着込んだつもりだったが、さすがに長時間この寒さの中にいたので、体は完全に冷え切っていた。

ちなみにこの時の彩人は気付いていないことだが、ガスが止められているので風呂には入れない、というのはこれから数時間後の出来事である。

暗い道にぼつんと立っている自動販売機が見えてきた。

相変わらずのしんとした中に立っている。

（さぞかし寒いことだよな。お前にしかわからないよな……。あいっらにはわからんだろうな俺の辛さは！）

彩人は自動販売機に語りかけていた。

「なにやってんだ……。俺……」

急にむなしさが沸き立ってきた。

家を出る前はもう八時を回っていたので人の影はない——と彼は思っていたのだが。

ザク……。ザク……。

「ん？」

自分の足音。彩人はそれとは別に、前方から雪を踏む音が聞こえたような気がした。

彩人は一度立ち止まって耳を済ませてみる。

ザク……。

かなり小さい音がする。

やはり彩人の前方に誰かが歩いているようだ。

ザク……。

道は街灯が無いので自動販売機が立っている所以外は真っ暗であり、誰かが歩いている様子は視覚ではわからない。

（へえー。俺と同じようにこの極寒の中を出歩いている人がいるんだな。あの三人はどうせ俺の苦労なんてわからないだろうが、あの人なら分かち合えそうな気がするな）

彩人はその人と同じ境遇にいたので共感できると考えていた。

今度は機械ではなくちゃんと人だ。

（しかもこんな時間に。多分もうすぐ九時になるんじゃないか？

足音からすると一人みたいだな。暗い夜道は危な——）

そんな時、ある事が頭を過ぎった。

（あつそういえば……）

彩人は学校の事を思い出していた。

この前学校で『不審者が出没しているので注意してください。できるだけ一人で下校しないで二人以上で帰りましょう』という連絡を聞いていた。

（まさかね……。ないない）

そんなことはないと考えを変えようとするが、取り除くことのできない不安がそれを妨げる。

（懐中電灯で照らしてみるか……。いや下手に怪しまれると嫌だな……

…)

しばらく立ち止まって耳を澄ましていたが、足音は鳴り続く。どうやらこちらに向かつて歩いていっているようだ。

それがわかると不安がさらに募った。

(でも狙われるのって、あれだろ、女子高生とかだよな。そうとうせ痴漢目的のとかだろ。大丈夫だな、ああ大丈夫なはずだ。ちょっと考えすぎだな)

彩人は歩き始めた。

(別に気にすることもない。普通にやり過ごせばいいんだ。いかな凝り固まった考えは)

ザク……ザク……。

ザク……。

二つの足音は近づいていく。

相手のほうはだいぶ歩くテンポが遅いようだ
雪を踏む音が次の一歩までの間がかなり長い。

ザク……。

ザク……ザク……。

自動販売機が近づいてきた。反対方向から歩いてくる人もすぐ近くまで来ているようだ。

彩人はとうとう自動販売機の前を通る。

相手を通ると同時に同時だった。

二人は自動販売機の前ですれ違う。

彩人は横目で自分の右側を通った人を見る。

(そう何の問題も――)

「な――」

彩人は目を見開いて、声を失ってしまった。

彼は自分の目を疑う。

神秘的なものが目に映った、そう脳の中で処理される。
銀色。

そうそれは雪に劣らないくらいの輝きを放つ。

彩人は目を離すことが出来なかった。

見とれた。この世の美しいものを見たときのように。

だからそれが傾いて倒れ始めているというのに、最初は銀色に輝いたものがなんであるかが理解できなかった。

だが彩人の体は本能的にもう動いていた。助けないと、と体が判断したようだった。

彼はもうすでにすれ違っていたため体を一八〇度回転させる。

その時にはその人は重力にだけ引き寄せられるように地面へと。

（くっ……間に合わない！）

そう判断して、受け止めるためには雪の積もった地を蹴って地面と水平に飛ぶしかなかった。

右腕を目一杯伸ばしてそれを掴んだ。

そのまま空中でその人の正面に入り込み抱きかかえる。

空中キャッチ。

彩人はその下敷きとなって一緒に地へ倒れる。

バサッ、と雪に埋もれ、積もった雪はその衝撃で舞い上がる。

「ふう………」

地は雪で覆われてクッションみたいに柔らかく、白銀色のそれと彩人を雪が同時に包み込む。
痛みはない。

彩人は体を起こすのと一緒にキャッチしたのも両腕で抱えて起こす。

「――！」

その後だった。彩人が本当に驚いたのは。

銀に輝いたもの、それは――少女。

その少女は、まるで雪に溶け込むことができそうだった。

先ほどの通りすがりに横目でみたもの。

銀。

彩人は改めて見てもまたそう思った。

美しい白^{はくせき}皙。彼女の長い銀髪は自動販売機のライトを反射して輝

いている。見たところ彩人より少し年齢は若く、背丈は小さい。色白な四肢。その体はほっそりと、またとても軽かった。

「――！」

だが見とれていたのは一時的だった。

他の重要な事がそれを遮ったからだ。

「おい！ 大丈夫か！」

彩人は彼女に叫んだ。

それは何故か。

銀の少女は衰弱しきっていたからだ。

少女は呼吸しているようだが、手足はピクリとも動かない。

彩人が手袋を外して、少女の頬に触れる。

「冷たい……」

彩人の手はこの寒さで冷え切っていたが、それでも彼女の肌の方が冷たい。

生きてはいるが、彼女からは暖かさ――人の温もりがほとんど感じられない。

そのような事など少女の姿を見れば一目でわかる。

彼女の服装はどう考えてもおかしかった。彼女の着ている服――

服というよりは、汚れてボロボロとなった布切れのようなものが一枚、少女を纏っているだけだった。生地は薄く、寒さを防ぐことなどではしない。

ましてこの寒さだ。体は直に冷えるに決まっている。

「こいつ、どういう頭してやがるんだ！」

彩人にはこんな格好で外に出るなど信じられなかった。

彼は新代荘を出る前に各種防寒アイテムに三枚着という完全装備でこの白銀の世界に赴いているのだから。

「そうだコーンスープ」

コーンスープで少しでも温められればと彼女の頬にあて、それから手に握らせる。さらに着ていた中で一番暖かいダウンジャケットを少女に着せ、その自身の身につけていたマフラーも手袋もつけ、

とにかく体を温めさせてあげられればなんでもよかった。

（この子……なんでこんなところに……）

彩人は少女の頭や肩に降り積もった雪を払ってあげる。

彼が歩いていたのは人影のない裏道だ。

辺りは民家が無いわけではないが、少女がこのような時間、このような場所で、しかも一人で出歩いているなど考えられない。

「これじゃあ、まさに不審者の標的じゃないか」

いくつかの不可解な点。

一つ目はこのようなまるで自分から寒さに殺されてしまいそうな格好。

二つ目は少女がこんな時間に出歩いていること。

三つ目はこの少女自体――

「何者なんだ……」

銀色の少女。

「外国人なのか……？　こんな人、今まで見たことがない……」

この町の人じゃないのか……」

少女はいまだ目を覚まそうとしない。

「とりあえずどうにかしないと。このままだと絶対に危ない」

その少女を放っておく事などできない。

彩人はそう思って、少女を背中に乗せ、少女を抱えるために後ろにまわした手でビニール袋を掴む。傘は少女を抱える両腕に乗せた。

「ひかたはいからはあ」

彩人は懐中電灯を口に銜える。

「はいひゅうへんほうははたへはふはった」

懐中電灯が小型で助かった、と言ったのである。

彩人はやるべきことをする。

「はあ。へんひょふりよふらー」

絶対に助けるからな、そう心に決めて彩人は全速力で走り出した。

一章（3） 暖房の効いた部屋で

カチッ……。

カチッ……。

カチッ……。

カチッ……。

ゴーン！

「遅い！」

九時を知らせる。

机に顎をついた若葉^{わかば}が氣力を無くしながらも声を張り上げる。

藍^{あい}、幸祐^{こうすけ}、若葉の三人は丸机を囲って座っていた。

「まあ仕方ないんじゃない？ この時間だとあそこのスーパーは閉まっているだろうし」

あのスーパーとは新代荘から最も近くにあり、藍が常連さんとなっているスーパーマーケット『イトヤスシ』の事である。

「あのスーパーの名前って変だよな」

と、幸祐が藍だけに語りかける。

「あれって、ほら、古語でしょ？ 訳すと『とても安い』だよな。

まあ古語は変って言えば変だけど」

「そうねー」

藍も幸祐だけに向けて返事を返す。

「あえて、ああしたってことも……」

「かもねー」

藍は爪切りに集中しているためそっけない返事しかない。

「ねえ？」

と、若葉。まだ机に顎をついている。

「ん？ どうした？」

幸祐が疑問で返す。

「何かさっきからさりげなくスルーされてる気がするんだけど……」

「……」
「ああ。ちなみに『いとやすし』は訳すと『たいそう簡単』『たいそう安らか』とかいう意味だぞ。値段が『安い』とかの意味はない。その辺に面白みがあると言ったのだが……。」

幸祐はそれ以上言うのは止めた。だからあえて藍だけに話していた。

「へえー……。ま、まああたしも知っていたのよ。ちょっとボケただけ」

「若葉。あんたちゃんと勉強してる？ 来週は学年末テストでしょ？ ああ幸祐、ゴミ箱取ってー」

藍が爪を切り終えた。

「藍さん……ゴミ箱そっち側にあるから藍さんの方が近い」

「だって、お腹がすいて力が出ない」

「全部藍さんのせいだけだね」

「ああ、ちなみにあそこのスーパーは『いとやすし』さんが経営してる」

「そうなん……って、さっきから話をごちゃごちゃにし——

——」

「で、どうなの？ 若葉？」

藍は幸祐の言葉から逃れるように再び若葉に話を振る。

「え？（チツ。うまく逃れたと思ったのに！）」

「前回の後期中間テストだけ？ テストの点数がひどかったわ、全く。せめて一桁はやめなさい」

「なぜそれを？！」

若葉の顎がとうとう机から離れた。

「あなたの部屋にある机の上から右から二つ目の本棚の美術の教科書の間の——」

「もういい……わかった……」

「あらそう？」

彩人、幸祐、若葉はそれぞれ自分の部屋の鍵を持っているが、新

代荘では藍がマスターキーを持っている。

「やっぱりプライバシーの問題とかがあると思うからさ。マスターキーの使用はやめようよ。ね？ そうしない？」

「それはできないわよ。洗濯物取りに行かないといけないし」

新代荘の唯一の洗濯機は藍の部屋にある。高校生三人が学校へ行っている間に藍がそれぞれの部屋から洗濯物を回収してきて、まとめて洗うのである。

「むう……………」

「洗濯しなくてもいいなら別にいいけど」

「わかった……………。そうそう鍵といえばさ。キーホルダーなん——

——

「で、勉強してるの？」

「くっ（またもかつ！）」

「話を逸らしたところでどうにもならないわよ……………」

「部活頑張ってるよ」

若葉は水泳部に所属している。今は冬なので、部活動はほとんどランニングや筋トレなどの基礎体力作りが秋からずっと続いている。「そんなことわかってるわよ。今はこの場にいな^{てい}体たらく坊やとは違うから。勉強も大事にしなさいってこと。来年はあんた達も三年生になるんだから。大学行くなってことなら無理してでもお金をだすわ。それくらいのことはしてあげる」

藍は一旦話を止め少し考える。

「いや、するわ…………… たぶん」

「た、『たぶん』が付くのね……………。わかった。勉強、少しは頑張ります……………」

「一生懸命がんばりなさい」

若葉は答えを返さない。

藍がギロリと目を若葉に向ける。

「わかりました……………」

「わかればよろしい」

「……幸祐には何も言わないの？」

さつきから会話に入っていない幸祐はというと畳の上に寝転がっていた。

「呼んだ？」

幸祐がむくつと上半身を起こす。

「幸祐に言う必要があると思う？」

「……」

若葉は口を紡いでしまった。

「えーと何の話？」

幸祐は状況が掴めていない。

「あなたは心配無用ということよ」

「まあいいか。彩人は？」

「まだよ」

「そうか……」

「もう空腹の峠を越えちゃうー」

若葉がパタンと倒れる。

「そういえば勉強って言葉で思い出したけど……」

「あれ幸祐聞いてたの？」

若葉がさつきまでの幸祐に代わり寝転がって言う。

「いやそうじゃないけど。寝てはいないけど、ただ寝転がってぼんやりとはしてた。それで勉強って言葉が何回も聞こえたから」

「ふーん」

と、若葉。

「それより幸祐。何か言いかけようとしていたんじゃないの？」

「そうだった。学校で先生が言っていたんだけど、最近、不審者が出るって」

「ああ言ってた言ってた」

「若葉、気をつけなさいよ。女の子は特に危険だから」

「その事なんだけどそういう不審者じゃないらしい」

「どういう事？」

「ええと……なんか、俺もどこで聞いたかは忘れたけど……放火魔
って言っていたような？」

「なんで疑問……こつちが訊いてるんだよー」

「いや確信無いからさ……あ、ああっ！」

幸祐が突然に大声を上げる。藍と若葉は手で耳を押さえる。

「急に一体なんなの？」

「炎で思い出した！　なんでこんな単純なことを忘れてたんだ……。
鍋を食べる以外の選択肢があつたはずなのに。藍さん？　炊飯器。
使えるよ、ね？」

「……過去のことよ」

「その開き直りは止めたら？　無駄だと思うよ、お母さん」

ここで三人は心の中で同じことを思っていた。しかし誰もそのこ
とを口には出さなかった。あまりにもこの場にいない少年を不憫に
思ったために。

一章（４） この世界の異常との遭遇

「はあ……はあ………」

白い息が出ては消える。

新代荘での他三名の会話を聞くことができなかった彩人は、この極寒の中でのお使いに伴う苦勞が必要なかったことなど知る由もない。そんな彼は雑木林に入っていた。

（さすがに女の子を背負って走るのは疲れる……俺も幸祐や若葉みたいに部活動に一生懸命勤しんでいればそんなにつかれないのかなあ）

初めの勢いは何処へ。今は走りから早歩きに変わっていた。

彩人は中学時代から帰宅部の道を貫き通しているので、運動をあまりせず、体力も筋力も幸祐には遠く及ばないし、女子である若葉にまでも負けることだろう。

（バイトできたらいいんだが……）

彩人たちが通っている帆布高校——新代荘から徒歩で通える距離（所要時間三十分）にあり、公立高校なので、経費がいろいろと浮くということに通うことになった——は原則、学生のアルバイト行為を禁止している。だが彩人は一年生の時に一度秘密裏にアルバイトをしていたことがある。その時には学校側には知られることなく続けていたのだが、藍の目からは逃れることはできなかった。彩人は藍からこつ酷くお説教を受けてしまった。それからは彩人だけでなく、若葉と幸祐もそのようなことは口に出さないようにしている。

（いくら貧乏だからってな……でも新代荘の、いや俺たちの現状を踏まえたと言えないのは理解している。理解しているつもりだ……。なのに……なのにだ！あの化粧品やは何だ！ずるい………というかひどい！俺たちには大した娯楽は与えられないのに！帰ったらまたとことん愚痴を言ってる）

それにこのお使いの報酬もない。ただ苦しむだけの罰ゲームみたいなものだ。

走るペースがやや落ちてきているが、雑木林の中間辺りまでやって来た。

（まだ半分ぐらいか……。もっとささつと行けるかと思ったのに……）

後ろの少女はまだ起きる様子はない。

（本当に大丈夫なんだろうか？）

と、その時。

「ん……」

耳のすぐ近くで声がした。

そんな近距離で声を出すことができるのは彩人に背負われている少女だけだ。

「起きたのか！」

彩人は目に留まった横に倒れた丸太に少女を座らせてあげる。そして大丈夫か、と声をかけコーンスープの缶を開けてそつと彼女の前に差し出す。

「飲みなよ。暖まるから」

少女はおぼろげな目をしながら缶に両手をのばしてゆっくり掴み、口にそつと運ぶ。すすつと音を立て、少しだけ飲む。

「もういいのか？」

一度缶に口を付けて話したきり動きが止まってしまった。眠いのだろうか。視線は下を向いたままではうつつとしている。

彩人が彼女の目の前で手を振ると、ようやく顔を上げた。

「だれ？」

少女は口を開いた。

「俺？ 俺の名前は彩人だ。フルネームだと『白上彩人』って言うんだけど」

「あ……、や、と」

「ああ、そうだが」

「あ、や……と」

少女はぼうつとしたまま『あやと』という言葉は何度も復唱し続け、だんだんとはっきりとした発音になってくる。

（一体、俺の名前を何回呼ぶのだろうか……）

彼女がその名をはっきりと言えるまで、彩人は彼女を見つめ続ける。

「あやと」

彼女はようやくちゃんと言い終えることができた。そして自分の呟き続けている言葉に突然はつとしたように顔をあげた。

「本当に……あやと……なの？」

彩人が聞いていた呟きはいつしか確認に変わっていた。

（どういうことだ？ これじゃまるでこの子は俺を知っているような）

「ああ、確かに俺は彩人だが……もしかして前にも会ったこと――

」

彼の言葉は途中で遮られた。それは不意に彼の視界の端に今まで無かったものが映ったからであった。彩人の右方数メートル先、ゆらつとした不気味な光が――

ふいに彩人の視線はそちらへ。

その方向を見た途端、目が大きく見開かれる。

光が眼前に迫っていた。そして迫りきった末に衝撃を生む。

「ぐあっ！」

気付いた時には体は吹き飛ばされ、雪の上に突っ伏していた。空気は氷点下にまで冷やされているというのに彩人は背中に熱を感じた。

（なんだ……。なにが……。どうなったんだ……）

思考を張り巡らそうとしても突然のことに頭が追いつかない。

（くそ……寒さのせいで頭がおかしくでもなったのか？ そうだ。さっきの、あの子はどこへ行った？）

雪が積もり氷上のように冷たい地面を這いつくばったまま顔を上

げる。

暗闇の中の転がっている懐中電灯が少女を照らしていた。彼女は彩人の前方にうずくまる様にして雪の覆った地面の上に寝そべっている。

（なんだったんださっきのは……とにかくあの子を起こしに行かないと）

起き上がって慌てて駆け寄ろうとする。

だが、それを妨げる一声。

「ちよっと待ってもらおうか」

（え？）

彩人は足を止めた。

（誰だ……？）

背後からずぶとい男の声。

彩人はその声に反応して瞬時に後ろを振り向いた。そうして彼はようやく気が付く。

「なんだよ、これ……」

彼の振り返った側は明るくなっていた。

ここは民家も近くにない雑木林の真ん中だ。もちろん電灯も立っていない。だから彩人は懐中電灯を使っていた。だがそれとは別に明かりがある。その光は懐中電灯よりも広範囲を照らしていた。橙色の光がゆらゆらと。

炎がその場を照らしていた。

その明るくなった方向から雪を踏みつける音がする。誰かが彩人たちに向かつて近づいてきていることは明らかだった。

だがまだ男の姿は見えない。

懐中電灯は少し離れたところに転がっているため、自分の手元にはなく相手を照らすこともできない。

「だ、誰だ……」

彩人は恐る恐る闇の中に尋ねる。しかし答えは返ってこない。
「誰だって聞いているんだ！」

彼の声は震えを押さえようともしやえられなかった。

二回目の質問でようやく答えが返ってくる。

「ふん。そうか。見えていないなら好都合。一般人に危害を加えるつもりはない。言う事を聞けばな」

足音が止まった。炎が彩人の前に確かにいる何者かの姿が浮かびあがる。しかし照らされているのは腰あたりまでで、顔はまだ闇の中で確認できない。

炎。

（そうだ。不審者ってそういえば放火魔とか何とか。まさかこいつが学校で言っていた……。本当に現れるなんて……）

彩人は放火魔もことを思い出したが、男の目的は放火ではなかった。彼の目的は他にある。

「それを置いてここから立ち去れ」

（それ？）

男は『それ』と言った。だが彩人には男の言った『それ』が何を指しているのかわからなかった。

彩人が理解できないという様子を見かねた男がもう一言添える。

「おまえの向こう側に転がっている『それ』だ、『それ』」

後ろを振り返ってもそこにあるのは、彩人の所持品かお使いで買ってきた商品が散乱しているだけ。元々雑木林に何があるわけでもなく、それら以外に男の指す『それ』など見当たらない。

（まさか……）

だがそれら以外にある。いや、いる。

そこには少女が一人。

（まさか……この子のことだっていうのか？）

だがそれ以外に考えられない。

（なんだ？ 少女誘拐？ 放火魔？）

「それ……、それ？」

彩人はさつき男の言った言葉をもう一度思い出していた。

（あの娘のことを『それ』と呼んだ……？ それに『転がっている』だって？）

声の主はまるでこの少女を人ではなく物のように扱っているようだった。この男の目的は彩人にはさっぱりわからなくとも、絶対に渡してはいけないということだけはわかる。

（ひどい……。とにかく何だか危険だ。どうにかして早くこの子を連れて逃げよう……。一気に連れて逃げれば何とかなるか）

彩人はゆっくりと気付かれないように足を反対方向に回したのだが……。

「おい！」

男の声が背後から呼び止めることによって、彩人の動きを静止させる。

「聞こえなかったか？ 小僧。もう一度言っ」

（あつちからは俺の姿が見えているのか……）

彩人は凍ったように動けない。

「その少女を置いて行け」

先ほどよりも強く、相手を従わせるように、彩人に命令した。

（置いていく。この子を……）

彩人は少女に目を移す。

そして手がガタガタと震えていることに気がつく。

（なに？ 俺は一体どういう状況に巻き込まれているんだ？）

頭の中で警告音が鳴り響く。どうしたらよいかわからず次の行動へと移れない。

「遅い、さっさとどけ。でないと消すぞ」

彩人の行動が遅いことに苛立ちを覚えた男はさらに脅しを掛ける。
（消す……だって？ 殺す……ってことか？ あいつは凶器でも持っているのか？）

もし凶器、たとえばナイフを振りかざされたとして彩人は身を守るものはない。

（傘……）

彩人の足元には傘が一本落ちていた。行きは差していたが、帰りは少女を抱えるため使っていなかった物だ。

（こんなので抵抗できるのか？）

「そうだな。仕方ない、とりあえず見せておこうか」

男の言葉とともに直後、暗闇の中に突如新たな明かりが浮かぶ。それは橙色にゆらゆらと。

（あれは俺が吹き飛ばされた時に見た……）

男の顔が浮かび上がった。けれどその男はサングラスをしていて顔を隠している。まるで正体を明かさないようにするために。

しかし問題はそこではない。

彩人の目はいつぱいに見開かれていた。

（あいつ……どうやって火をつけやがった……。いやそうじゃない。どうなってるやがる……あれは———！）

彩人の視線はその男の左手に向いていた。

その左手は異様だった。異常、だった。

「化け……物………」

彩人は気付いていなかったが、それを見た率直な感想が口からこぼれていた。

「ああ………」

男の方も自身の左手に目を向ける。

「ははは。そうだな」

男は自分の手に火が灯っているというのに何の変哲もないような目で見ている。

「お前達から見れば化け物かもな。どうだ？ おもしろいだろう？」

彩人は言葉を返すことができない。

（何なんだ……あれは？ 絶対におかしいだろ！）

「ビビッちまったか？ それはすまなかったな。さっきのはコイツをおまえの足元に放ったんだ。雪が融けるのは……まあ当たり前か。次はおまえの本体を狙う。だからただでは済まないぞ。もしかした

ら灰なら残るかもしれないな。一般人に知られたからには抹殺する。口封じってやつだな」

ははは、と含み笑いをしながら一方的に語りかける。その時でも男の左手は異様さを保ったままだ。

男の左手——彩人が化け物と称したその左手から火が上がっていた。闇の中で不気味に煌く。いびつな光景。にわかには信じがたい火が上がっている、もしくは燃えているといった表現のほうがぴったり合うかもしれない。だが手が焼けているわけではない。男は火の暑さもどちらにしてもこの事態が異常なことには変わりはない。（逃げなくちゃ……そうだ早く逃げないと……。俺は何をこんなところで立ちすくんでいるんだ！）

とにかく逃げることに、それが最優先事項。

（早く逃げないと殺される！）

彩人は慌てて帰る方向——皆の待つ新代荘——へ走り出そうとするのが、すぐに止まってしまふ。踏み出した右足だけが前に出ている。

（！）

彩人の前には少女が横たわっている。

（くそ……）

彩人はこの状況をとても恐れていた。夢ではないかとも思っている。早く逃げなければ確実にただでは済まない。声の主は少女を置いていけば危害は加えないと言った。少女をまたいででも逃げる事に専念すれば命は助かる。

（死にたくない……）

帰ったら待つてくれている人がいる。彼らはお腹を空かせて待っている。彼らは今自分がこんな状況に置かれているなんて微塵も考えちゃいないだろう。自分は平和な日常が、ただ何事もなく過ごせばそれだけでよかった。だからこんな状況は不幸以外の何物でもない。明日は月曜日だ。明日から新しい一週間が始まる。普通に学校にだって行く。だから自分が死ぬなんて考えられない。ただ日々

を送っていた自分が。

彩人の頭の中でそのようなことがぐるぐると回る。

死にたくない、それは紛れもなく本心だ。

色々な事がぐるぐると。

（それでも）

これから出す決断は彩人にとってよいものになるかどうかかわからない。

それでも。

（置いていけるわけがないじゃないか……）

この状況で女の子を一人置いて逃げるなどということは、彩人にはできなかった。

だが、しかし。

（だけど……だからって俺に何ができるって言うんだ）

相手は化け物だ。手から火を出すなどただの人間ではない。

（奴には俺が見えている。いや、あの懐中電灯さえ消せれば……奴からは見えなくなるかもしれない。あれさえ消せたら逃げられるかもしれない）

もちろん少女を連れて。

「ま……待ってください……いや、ください……。わかった。俺は今すぐここを立ち去る。だから命だけは助けてください」

必死に救いを求めながら、彩人は男の出方に気を配りながらゆっくりと歩き出す。

「そうだな、まあ大目に見てやろう」

男からの返事に彩人は一先ず安心する。

（よし、このまま懐中電灯を拾い上げてあの子を……）

懐中電灯を拾い上げようと手を伸ばした時、熱風が横を遮った。

「熱っ……」

とつさに庇った腕をどけると空けた空間があった。

もちろんさつきまではこんな風になっていなかったはずだ。

そこには木々が何本も立っていて――

今やそこからは煙が立ち上り、積もっていた雪は忽然と姿を消し、残ったのは黒く焦げ炭と化した木々、残り火がところどころにあり、その光景を見えるように照らす。

「あ……あ……ああ……あ……ああ……」

「嘘を付くとは悪い奴だ。俺を見くびりすぎだ。全く、お前の行動などお見通しだよ。所詮、ガキの考えることだ。まあおもしろいから見逃してみただけだな」

再び男の手に炎が灯る。

「これでお前の置かれている状況ははっきりとしたか？お前にはもう助かる余地はない」

彩人はもう絶体絶命だった。唯一の逃げる手段——命の助かる手段は自分の手でつぶしてしまった。

「火葬^{かそう}つて、この国もやっていただろう？　ちようどいいな」

彩人はどんどんパニック状態になっていく。

「骨は残る程度の火力にしといてやるさ。あ、でも痕跡は残したらまずいか」

男の言葉は彩人の耳に入っていなかった。それどころではなかった。今の彩人にはもう何を言っても聞こえない。

「跡形もなく消す。それと後ろのそれはたぶん大丈夫だ。お前だけを消す。それは大事な回収物だからな。それまで消し飛ばしたら、俺が今こうして何のために働いているのかわからなくなる」

彩人はもう終わりだと思った。

（俺って何してたっけ？　俺は藍さんにお使いを頼まれ、コンビニ行って、それで帰ってきてるとこだった……よな？　どこからおかしくなったんだろう……。この子と会ってからか？　俺はただこの子を助けようとしただけだ。そしたらいきなり化け物みたいなのが現れて……それで……）

「悪いな、小僧」

口先だけの男の言葉に同情の念。そして男は最後の言葉を彩人に告げる。

「灰になれ」

男は彩人に向かって火を宿した手を振りかざした。

膝は制御できなくなった機械のようにガタガタと震え、避けようとする事すらできなかった。膝についてただ炎が迫り来る方を向いているだけだった。

橙色の光が彩人の視界を埋め尽くす。白い雪と黒い闇を染めるように。そして夜の銀世界は橙色へと塗り替えられていく。

一章（5） 彼の答え

（俺……死ぬのか？）

そう思った彩人は目をつぶった。恐怖から目を逸らしたくて。もう助かりようがない。

だが、いつになっても炎の熱は感じられなかった。

（あれ？ 少しも熱くねえ……。むしろ普通に寒いままじゃねえか……。さっきの雪の中を歩いてる時と変わらない。ははっ、もう死後の世界だったりして……。それが死体になって俺自身が冷たくなっただか……。）」

「防いだだとっ？！」

声が聞こえた。

彩人のものではない。

（何だ？）

驚いた声を上げたのは、炎を手で操る芸当を見せ付けた化け物のような男だった。

彩人はそっと目を開ける。開けることができた。それはつまり。

「生きてる……。俺……。生きてるのか？」

（なんで？）

その答えは目の前の光景を見ればわかった。

炎は彩人を襲ってきていた。確かに。

だが。

「どうなっているんだ……」

炎は何か見えな壁のようなものでせき止められているように見える。

そして。

その炎が阻まれている——見えない壁の前に一人。

「……」

そこに立っているのは男ではない、ましてや彩人のはずもない。
この場にいたもう一人の人物。

「さっきの……さっきの子なのか……」

そう、そこに立っていたのは銀の少女。

長い銀色の髪を揺らしている。

少女は見えない壁に手を当てている、否、かざしているとも言える体勢だった。

「あんなに弱っていたのに……」

彩人の言ったとおり少女は衰弱していた。目を覚ましてもずっとおぼろげな目をしていて意識がはつきりしていなかったというのに。「ふんっ、まだ動けたとはな……。それは予想の範囲外だ。さすがはB等級^{ランク}だな。よくもその状態でも俺のD等級^{ランク}の攻撃を防ぐことができる。万全の状態だったら俺は返り討ちにあつて、瞬殺されていただろうな」

（なんだ？ 等級^{ランク}？）

男の言葉には、その世界に生きる者にしか理解することができない言葉が含まれているようであった。

「ねえ……？」

少女の声だった。小さく、とても弱々しい消え入りそうな声で少女は言った。

彩人は耳を立ててどうにかその声を聞き取る。

「な、なんだ？」

少女の口から出た一言は端的だった。けれどもそれは彩人の胸を強く締め付けた。

その言葉は。

「逃げて……」

（そんな……）

彩人は信じられなかった。確かに彩人にはこの状況をどうすることもできない。しかし、少女の先ほどの容体、消えそうな声、それ

らが少女だつて深刻な状況だということを彩人にわからせる。
助ける側と助けられる側がいつの間にか入れ替わっていた。
それは一瞬で。

「君は……君はどうするつもりなんだ！」

一瞬で助けられる側に移つてしまった彩人はとても無力だった。
ただその異常な光景を見ていることしかできない。

「わからない……私は……いつまでもこうしていられる……わけじや……ない。だから早く。早くしないと……この壁が……もう……」

壁、という言葉に疑問を感じた彩人は目を凝らして見えない壁を見た。いや、完全に見えないわけではなかった。かすかにその場で炎よる光がぼやけて見える。

（溶けている？ あれは氷なのか？）

透明な壁は水滴のようなものがたくさん付いていて、それがたらたらと垂れていく。まさしく氷の造形物。だがそれはしだいに氷壁が徐々に薄くなつていく表れだった。

「鬱陶しいぞあー！」

男が叫ぶと彼の怒りに焚きつけられてかのように火力を増す。
それにしたがって壁が融ける速さは早まる。

「彩人！ 早く逃げて！」

少女が彩人に告げる。かなり焦っている調子だ。

（……砕ける！）

彩人は直感で悟り少女に飛び掛かる。

壁が砕かれるのはその数秒後だった。炎が壁を突き抜ける。

（避けられるか？！）

壁を突き破った炎は次々と雪を食らい尽くしていく。そして彩人と少女がさつきまで居たところは雪もなにもなくなる。

彩人は少女の体と一緒に道の脇にある。

「だ、大丈夫か……」

彩人は少女に覆いかぶさるような体勢で尋ねる。

「うう……」

「よかった……生きてる……」

さっきの炎によって懐中電灯はお陀仏になってしまった。そのためさっきより暗くはなったが残り火が代わりに照らしている。

二人は何とか炎から逃れることができた。

だがそれで終わりではない。

「せっかくの逃げる機会だったのにな、小僧。それを自分で無駄に
してしまうとは。もうお前が灰になるまでの時間は少ない。だから
少し与太話でも混ぜて生きる時間を延ばしてやろう。小僧、お前は
さっき俺のことを『化け物』と呼んだな？」

「……それがどうした」

「それも同じだ」

男は少女を指差す。

「この子も同じ……」

「そうだ。同じだ。この世界の異常。ブラウイタス『異常』を。見ただらう？」

それがさっき氷の壁を作って俺の炎を防いだのを。だからそれもお
前の言う『化け物』だ。まあ正確には『化け物』ではなく『アルター改変者』
なのだがな。それを踏まえた上でお前はそれをどう思う？」

「……どう……思うだと？」

「危険だとは思わないか？」

根本的なことは男と少女は変わらない。どちらも同じ。普通では
ない。異常だ。

「でも……」

彩人は唾を一飲み。

「この子は……違う」

「なぜ？」

「それは……」

彩人は返す言葉に困ってしまう。

「違わなくはない。同じ存在だよ、それは」

「……」

「所詮俺たちの生きる世界はお前達、一般人とは違う。じゃあそれ

はその中に入るか？ 入らないだろう。常識、法則、そんなものから外れたそれも俺たちの世界にしか入ることしかできない。お前はそれをどうするつもりだ？ お前達の世界で生きていくことなどできはしない」

「俺は……」

「情けをくれてやる。もう一度だけお前に選択肢をやろう、最後のだ。お前の命を守るか、それを守るか、お前はどちらを選ぶ？」

「俺は……」

彩人に与えられた最後のチャンス。男は少女を素直に渡せば命をとるまでのことはしない。少女を引き渡したら、醜く情けない姿を晒しながら逃げることになる。男の目的はわからずとも、そうすれば一人の少女を自分の身代わりにしたことだ。

だがこの機会を逃せばこの場で死ぬ。

（俺はやっぱ死にたくない）

真っ白な人生を送ってきたにも関わらず、これからもそのような空虚な日々を続けたいと思っているのだ。生きたいと思っているのだ。理由もなく。何も得ることはできないわかっていながら。

死にたくない。

生きたい。

だが。

これは彩人自身も本当にわからないことだった。誰かが彼に囁いているようだった。そして彩人自身もその囁きの選択は正しいと思えてしまう。

この選択で、もし違うほうを選んでいればこれからもずっと変わらない日々を送っていたのかもしれないのに。だがこの時の彼には初めから選択肢などなかったのかもしれない。『前』の彼でなくとも、八年前の『あの時』から答えはもう決まっていたのだとしたら。『俺はやっぱりこの子を守る』

それが彩人の出した答えだ。この答えが彼に『変化』をもたらず。（俺はこの子を守らなければならない。そんな気がする。そんな気

がするんだ！)

彩人はこの少女にはなぜか懐かしさを感じていた。だがそのようなことはあるはずが無いと改める。

「そうか……」

言葉とともに炎が出現。

「残念だ。お前達の世界とこつも触れ合ってしまったのだな。だいぶ回り道をしてしまったようだ。さっきのお前が言った言葉を忘れるな。それがどういう答えかちゃん理解したつもりで答えたはずだからな。もう容赦はしない」

男は無防備な二人に近づいていく。

「早く逃げるぞ」

彩人が少女の手を引つ張って立ち上がらせるために、手をつかんだその時。

(なんだこれ?!)

頭か体か、何かがダイレクトに流れ込むような異様な感覚が彩人を包んだ。

「次は先程みたいにうまくいかないぞ？ もうそれは力を使えないだろうからな。これで本当に最後……」

男は異変に気付く。表情が真剣な顔つきになる。

警戒しろ。

彼の直感がそう告げた。

「なんなのかわからんが……さつさと片付けた方がよさそうだ」

男の手に炎が灯る。今度の炎は今までの物とは形状が異なる。ただ手から燃え広がっている炎は徐々に細長くなっていく。最終的には矢のような形になる。今、炎を普通に放つたら少女までも巻き込んでしまうと思い、彩人だけを仕留めるにはこの形状が最も有効的だと判断した。

「はっ！」

男は炎の矢を彩人目掛けて解き放つ。炎の矢は一直線に彩人へ向かう。

少女の手を掴んでから微動だにしていなかった。体が固まっている。

矢が彩人に突き刺さりそうになる瞬間。

[illegible]

男が炎を放った時に橙色の光が夜の闇を満たしたように、今度は

男は白い光の眩しさに怯む。

「何をした！」

視界ももちろん真っ暗だ。

「はあ……はあ……」

（俺、今、なにを？）

片手で頭を抑え、焦点も合わないまま地面を見ていた。

彩人と少女はまだ同じ場所にいる。無傷だ。

消えたのは彩人ではなく、炎の矢の方だった。

「これは……」

辺りは一変していた。

さっきまで焼かれて何もなかったはずの場所の地面が一面凍っていた。そこだけではない。彩人と少女を中心に辺り一体が凍りついていた。木々までも。

「小僧、何をした！」

男は彩人に尋ねるが、当の本人である彩人にも状況は掴めていない。

フラウイタスターゲット

「いやこの異常は標的のもので間違いない。まだそれに余力が残っていたというのか？ いや、だがもう限界だったはずだ」

男は彩人の方を睨む。

「まさか……この小僧がやったというのか？」

そんなことはあるはずがない、と首を振る。

「いや確かにこの氷はあれの力だ……。やはりまだこれほどの力を残していたということか……。侮れんな。B等級^{ランク}はだてじゃない、ということか」

この時、男は気付いていなかった。

凍っているのは地面や木々だけではないことを。

「これは……体が動かないだ！」

炎を灯している右手から離れた部位は凍っていて身動きがとれなかった。

（どうしたんだ？ もしかして動けないのか？）

その男の様子を見た彩人は、これは二度とないチャンスだと思った。

二人と男の距離はまだ五メートルはある。

（今のうちに逃げるしかない！）

彩人は少女を再び抱える。

（あれは……）

二人がいる所に生えている木の脇に、コンビニで買った商品が入った袋が落ちていた。

（そうか！ あれを使えば）

彩人はそれも拾い上げて走り出した。

「くそっ！ おい、待ちやがれ！ 小僧！ こうなったら標的ターゲットに多少の火傷ができて仕方がないな。まとめてだ！ まとめて焼いてやる」

男は悪あがきで最初に使った火炎攻撃を今度は二人に向ける。

「そんな……！」

彩人は首だけ回し後方から迫る炎を見る。足は常に動かし続ける。

（このままだと食らっちゃう！）

少女を背負っていて、ただでさえ両手が塞がっているから、避ける余裕もない。

しかし炎は見えない壁に防がれる。

彩人は少女の方に目を移す。

「ありがとよ。助かった」

と、囁く。

少女はずっとぐったりしたままで反応はない。男の言つとおり、もう残りの力も少ないようだった。

「甘いなあ！ この距離でも俺の炎は届くぞ！」

留めだ、と言わんばかりの大声で男は叫んで今までで一番大きい炎を出現させる。

（このくらいか……）

彩人は立ち止まり少女を下ろす。

「ああ、そうだな」

そう。この距離なら。

彩人の目的は男と一定の距離をとることだった。

「この距離なら俺たちには被害はないよなっ！」

レジ袋に手をつ突っ込んで中身の一つを掴み取る。これは少女のよ

うに氷壁を作って防御のできない、ただの高校生でも可能な悪あがき。掴み取ったそれを思いつき男の方に向かって投げつけた。それは闇の中へ姿を消す。

男は一回り大きい炎を放射する。

「消えるおおおおおお！」

「消えるのはお前のほうだ！」

二人の叫びが交錯した直後——爆発が起きた。

静けさの満ちた夜に爆音が響き渡り、爆風が雪を舞い散らす。

「うつ……」

彩人はすぐに少女の体を腕の中に収める。

必死で爆風から少女を庇う。

爆風に耐え切れなくなつた体が後方へと吹き飛ばされるが、今度は少女を手放すまいとしつかり抱えたままだ。そのまま雪の上につ伏せに倒れ、爆風が治まるまで少女を庇い続ける。

やがて爆風は止む。

雪の夜は静けさを取り戻した。

彩人は想像以上の結果になり完全にびびっていた。

（予想以上だ……）

彼は自分では気付いてはいなかったが冷や汗がたらたらと出ていた。心臓をバクバクさせながら爆発のあつた方を見る。

「……やったか？」

作戦が成功しても油断せず、彩人は警戒を解かない。爆発の起こつた方向をしばらく見続けていた。

「……」

男が追ってくる様子はない。

「ふう」

彩人は全身の力を抜いた。

「はは、はは……」

彩人は起こったことをただ笑うことしか出来なかった。

「これにこんなにも威力があるなんてな……」

レジ袋から男に向かって投げたものと同じ商品を手に取る。

彼の手にあるのはそう——ガスボンベ。

それが男に向かって彩人が投げたものだった。

辺りが暗かったおかげで、男はそれを確認することができなかったのが幸いして、そうとも知らず男はそれに向かって炎を放った。

結果、火がガスボンベに引火。

そして、ガス爆発。

藍に買ってこいと頼まれたものが彩人の命を守るための強力な武器となったことは事実だ。

「……俺はとんでもないことをしてしまったたんじゃないか？」
とにかく必死だったので自分の行為がどれほど危険だったのかをあとあとになってわかった。

これは『絶対にまねしてはいけません』の項目に完璧に当てはまってしまうが、まあ結果オーライ。

彩人はそうまとめた。命がある。少女を守りきった。それでいいじゃないか、と。

ようやく気を落ち着かせるようになってきた。

「一体なんだったんだ……」

彩人に起こった出来事。それはたかだか数分の出来事だった。だがそれはあまりにも衝撃的だった。銀髪の少女との遭遇。その直後、自分は何者かに突然襲われ、少女を渡せと責められた。さらにはその男は手から火を生み出すなどという人間離れしたことをやってのける。その火は何度とも彩人を狙って襲い掛かってきた。

（俺、生きている、よな……）

彩人は今でもこの出来事を信じられなかった。

だが、これでもう安心。

脅威は去った、はずだった。

「よくも……よくもやってくれたなああああああ！」

怒り狂った叫び声さえ無ければ。

御されなくなつた。火炎球は球体を保つことができず、無数の火の粉となつて散らばる。

彩人は少女に預けていたダウンジャケットをとつさに掴んで頭から被り、少女の上にかぶさるように彼女を庇^{かば}う。

「くそ……。てめえら『OASP』の連中……か」

「これより改変者^{アルター}の削除を行います」

乱入者の一人が言う。

彼らは全部で三人。二人は黒服に身を包みいかにも怪しげな人物で、残りの一人は装飾品だらけのチャラついた格好をしており他の二人と比べて若い。二十歳ぐらいに見える。

（助かった？）

彼らが男の動きを止めてくれたおかげで火炎球は防がれたが、彼らはそれを防ぐために拳銃を用いた。そのようなことをするならば一般人であるわけがない。

敵か、味方か。

まだ安心はできなかった。

「待て『T2』、部外者と思われる二名を確認」

「『T1』了解。どうされますか？ 木賊^{とくさ}さん」

木賊。

そう呼ばれたこの集団のリーダーらしき人物は薄気味悪い笑みを浮かべてブレスレットやネックレスをちらちらと鳴らしながら、どうしようか、と顎に手をあて考える。

そして彼の口から解き放たれたのは。

「殺^やっちゃえ」

「了解しました」

（なに！）

黒服の一人が拳銃を持ち近づいてくる。

「殺されてたまるか！」

そう叫んだのは炎を操っていた男だ。

炎を灯した手で黒服の男の顔面をわしづかみにする。

「があああっ」

炎で顔面を焼かれうめき声を上げる。

彩人たちに向かつていた黒服の人もそちらを向く。

「へえ、頑張るねー」

木賊は少し離れたところからこの現場を見物しているようだった。仲間がやられているのに、楽しんでるようにさえ見える。

「貴様らまで邪魔しやがってええええ！」

今度は男の周囲で渦を巻く。

もう一人の黒服は腕を組んで防御体制。男の攻撃は今ももう彩人たちに向けられていなかった。

「彩人……」

「き、君！」

少女はまた目を覚ましていた。まっすぐ彩人の顔を見つめている。

「今からルネが彩人を守るから」

「ルネ？　それが君の名前？　……っていつか守るってどういうこと?!」

ルネと名乗ったその少女はその場に立ち上がる。

彩人には今から彼女がしようとしていることがなんとなくわかった。彼女が使う特別な力でこの場を鎮めようとしている。残りの力がわずかだというのに。それには対価があるにも関わらず。

ルネは言う。

「いい彩人？　たぶん『今』の彩人にはわからないと思うからさ、ルネが変なこと言っているように聞こえると思うけど聞いてくれたらうれしい……」

「え？」

「また巻き込んだじゃって、ごめん。たぶんルネも次に目が覚めたら『今』のルネではなくなると思うから。もし、また危ないことがあっても大丈夫だよ。だって彩人には『世界を変える力』がある。だから諦めちゃ駄目だよ」

「それはどういう……って、ルネ待って！」

彩人の言葉を待たずにルネは前へ踏み出した。ふらつきながらも前へ。彩人から離れていくように前へと。

「彩人。最後にまた会えてよかった」

ルネは最後に彩人の方を振り返り――初めて笑顔を見せた。だがそれはどこか悲しげで。

次の瞬間。

とても綺麗な銀色の光がその場をを包み込んでゆく。

銀色の光が彩人の視界を覆う。

「チッ、あいつも改変者^{アルター}だったか！ 『T1』『T2』引き上げだ

！」

これから起こることの危険性をいち早く察知できたのは新たな乱入者のうちの一人、木賊だった。部下二人に退却を命じる。

（眩しい……）

彩人はあまりの眩しさに目を開けることができない。この光の中で何が巻き起こっているのかまったくわからない。

やがて光は収束を初め、また元の暗闇へ。先ほど火炎球による火の粉が無数に飛び散って周囲の木々に燃え移っていたはずなのに、今は蠟燭^{ろうそく}のように軽く枝などに火が灯っているだけだった。

光が消えた時には全てが終わっていた。

炎を操る男も、新たに乱入してきた謎の三人組も姿はなくなっている。

この場に残されたのは彩人を除いて一人だけ。

「ルネ！」

その場所に残されたのは銀色の髪の少女。彼女の体力尽きたように倒れた体の上に天から粉雪が舞い降りる。彼女と似たその雪は彼女の体を溶け込ませて、このままでは彼女を覆い隠してまいそうだった。

彩人は急いで少女の元に駆け寄った。そして抱きかかえる。

「大丈夫か！　おい！」

声をかけても少女は目を覚まさない。あの光は間違いなく彼女が氷を出現させたように、何か特別な力を使つて引き起こしたのは明らかだ。おそらく余力を全て使い果たしたのだろう、と彩人は思う。

（とにかく早く連れ帰ろう！）

彩人はルネを背負い新代荘へ急いだ。

一章（7） 週末の終末

新代荘に着く頃には午後九時半を過ぎていた。

「藍さん！」

彩人は少女をおんぶして両手が塞がっているため、ドアを開けることができず、部屋の中にいる人に開けてもらおうと、藍を呼ぶ。

「藍さん、開けて！」

扉の向こうでバタバタと足音が鳴る。足音が止んだ後、ガチャツ、と扉の反対側で鍵を開ける音が。

「うっさいわよ！ ご近所の事も——」

「藍さん！」

何よ、と藍の声がして扉が内側から開く。

「早くこの子を！」

藍は彩人の背に目を落とすルネを見る。

「——！ なぜここに……」

「この子、すごい弱ってて。俺が帰ってくる途中で倒れていて……、って藍さん聞いてますか？」

藍は少女を見るなり、驚きの表情を崩さず、そのままずっと少女の方を見続けていた。彩人の話は耳に通っておらず、それより別の事が重要な事態だといったかのようなのである。

「どうかしたのー？ 早くご飯ー。もう峠を過ぎちゃったよ」

部屋の奥から、食事はまだかー、早くしろー、と若葉の待ちわびたという言葉が飛んでくる。

「あ、あそうね……。急いで部屋へ……」

彩人は藍の後を着いて行く。室内は外とは比べ物にならないほど暖かい。

だがこれで安心だ。ここまで来れば、ルネも温まることもできるし、炎の男や黒服の男たちのような者は襲ってこないだろう。

（これでもう安心――）

「不審者が現れたわ！」

「はあ?!」

彩人が口を開ける。

「なんだって?!」

若葉と幸祐が驚きの声を上げる。彩人も心の中で同じ事を叫んでいた。

（まさか、藍さんはさっきの出来事の事を知っているのか?!）

「彩人がとうとう少女誘拐を犯したわ！」

「はあ?!」

またも彩人の口が開く。

藍は相変わらずであつた。

彩人はその様子を見てさっきの違和感など気に留めなくなった。

そのようなことよりもっと重要なことはいえ――

（なんで俺が不審者扱いされるの?!）

何だと、と彩人と藍が丸机の置かれた部屋に入るより先に若葉と幸祐が飛び出してきた。

「え、なにこの子！ え、えっとこの子……外国人？」

「そうとしか言えないだろう……」

若葉と幸祐の二人は少女の綺麗な銀髪に戸惑っていた。

「それより早くこの子をなんとかしてあげて……」

彩人は新代荘に帰ったらすぐさま藍たちが行動してくれるだろうと思っていたのだが。

（扉を開けた時から何故か迅速にほいほいといかないんだ。今はそんなことをしている場合じゃない）

と、不満が溜まっていた。

「若葉は部屋に布団を敷いて、できるだけたくさんの毛布とか用意して」

「あ、うんわかった」

「彩人、その子を」

「あ、はい……」

彩人が藍に少女を託すと、藍は部屋に入っていく。

「藍さん、俺は何かやることありますか」

役割の与えられていない幸祐が協力を志願する。

「そうね、とりあえず彩人を取り押さえとして」

「だから何で?!」

困った様子で幸祐が彩人に近づく。

「……だそうだ」

「だそうだって……おい! マジでやんのかよ!」

「いやー、そう言われちゃったから……」

「言われちゃったからって……」

ちなみに今の彩人の状況説明をすると、腕をとられ、顎は床につき、がっしりと幸祐に取り押さえられている。

彩人は暴れたが逃れることはできないと悟り、おとなしくなる。

それを見計らって、彩人よりさらに状況が理解できていない幸祐が気になっていることを聞く。

「ところで、あの子、どうしたんだよ?」

「あの子は……」

言葉を詰まらせる。

(あんな事があったなんて話せるわけがないからな……)

「あの子は道で倒れてたんだよ……。それで俺が助けてここまで運んできた」

間違ったことは言っていない。

彩人が少女と最初に出会ったのは狭い路地だったし、助けたのは事実だ。

「そうか、色々大変だったな」

「ああ……」

頭を、あの男、あの黒服たち、そして最後にあの少女の事が過ぎ

る。

「大変だったよ」

その言葉はより重かった。

「なあ、幸祐？」

なんだ？ と、幸祐が聞きかえす。

「そろそろ放していただけないでしょうか？」

「ふむ」

彩人の腕を背中に戻してすっかり固定していた幸祐の手が放れる。
（こいつ、見た目と沿わずに案外、力強いんだよな。まあ部活で鍛えているんだから当たり前か）

彩人は立ち上がって部屋に向かいルネの様子を見に行く。

「容態は？」

ルネは布団の中でぐっすり眠っているようだった。

「そうね。やっぱり体がとても冷え切っていたわ。とりあえずこのまま暖かくして安静にして置きましょう」

「この子の髪、綺麗だね」

若葉がポツリと呟いた。

彩人は今こうして改めてみてもそのルネは綺麗だと思った。最初に会った時、気を失っていた時の彼女の顔はつらそうな顔をしていた。しかし、今は苦しみから解放されて安らかに眠る姫のようだ。

彩人はその様子を見てほっと胸を撫で下ろす。

「さっ、この子はたぶんもう大丈夫でしょうから、私たちは食事よ、食事」

藍がぱちんと手を叩いて、空気を切り替える。

「そうじゃん！ 晩御飯まだじゃん！」

「もう空腹の山をとくに通り過ぎた……けど、やっぱり空腹に変わらない」

「つーか俺、めっちゃ寒い」

ガタガタと彩人の体が高速振動する。

「俺、先に風呂入りたい……」

その言葉が皆の忘れていたことを思い出させる。

「そういえば、風呂も駄目だったわね……」

「……今日どうするの？」

「明日までには何とかしておくから今日のところは我慢して」

「母さん、この借りはきつちり返してもらっからね……」

若葉の怨念おんねんに満ちた視線が藍を突き刺す。

「……さあ、鍋作るわよー！」

「聞いてないな……」

その後、四人で鍋を作って食べた。

彩人は鍋のおかげで何とか体を温めて持ち直すことに成功。

四人で鍋をつついていている間にルネのことについて炎の男や黒服のことは避けて説明を終えておいた。

ごちそうさまでした、と四人で手を合わせて食事を終える。ルネが起きた時の為に鍋の具は少し残してある。

「じゃあ今日はこれでお開きね」

四人とも丸机から立ち上がる。

「じゃあ、おやすみー」

「おやすみ」

若葉と幸祐が各自、自分の部屋へと戻っていった。

「彩人、あなたも自分の部屋に戻りなさい」

「ああ……うん」

彩人は少女の事が気になって、まだ彼女が寝ているそばにしゃがんでいた。

「ルネのことは、後は私に任せなさい。明日は学校でしょう？」

「わかった……」

渋々、彩人も自室へ戻ることにした。

彩人は自室に入るなり朝からたたんでいなかった敷布団に寝転がる。

「夢じゃないもん……」

今日の出来事を振り返っていた。

（お前達とは違う世界）

男の言っていた言葉を思い出す。

（あの子はこれからどうなるんだろう。俺たちみたいに新代荘で暮らすのかな）

彩人が新代荘に初めて来た時の事。

あの時の俺はどうだったっけ、と思い出そうとしてみるがいまいち思い出せなくて断念する。

（あの子は……俺たちの世界では……生きていくことはできないの
だろうか……）

そのまま眠りへ落ちていった。

一章（８） 週末の延長

ここは『〇〇一号室』、新代藍の部屋。

藍は少女が寝ている横で座っていた。もう彩人たちが帰ってか
らずつとこうしている。今頃彼らはもうおそらく皆眠っているだろ
う。

「やっぱり……この子なのね」

藍はその少女の名前を独り呟く。誰に語りかけるわけでもなく、
いや自分自身に語りかけているのかもしれない。

「また……私たちはあの世界に戻らなければいけないのかもしれない
いわね……。もう二度と関わらない。もうあの子達を巻き込まない
私が守ってみせる。そう心に決めたともしりだったのにね……」

独り言は続く。

「この子がなんでこんなところにいるのか確かめなくちゃいけない
わ。もし奴らがこの町にまた……。また狙いに来ているのだとした
ら……。いや、それは不自然すぎる。この子が一人でいるってことは
ありえないわよね……」

藍はルネの頬に優しく手でなでる。

「二度と関わらないって決めたけど……」

藍は立ち上がって電話の前に行って受話器を取る。

「やっぱり気が進まないわね……」

受話器を取ったものの電話番号を押そうとしない。

（あー、もう！ あいつに掛けるのか！）
頭を掻く。

「これはあの子達のため！」

決心して電話のボタンを押していく。その電話番号にはもう何年
も掛けていない。昔の知人であり、それ以上に仲間であった者の元
へと電話を掛ける。

ブルルルル、と五回ぐらい鳴って、もしかしたら出ないのではな

いかと、期待してしまっただ、期待はすぐに打ち切られる。

『もしもし?』

男の声。懐かしい声だ。

『久しぶりね……』

藍は気乗りしない調子で語りかけた。

名乗ってもいないのに電話の相手はすぐに理解したらしく、

『ああ久しぶりだね』

と、返事は藍と相反して明るく、うれしさを隠しきれていないのが軽やかな調子だった。

『どうしたんだい突然? もう二度と掛けてこないと思っていたのに。まあ一応こちらの電話番号は変えておかなかったのは正解だったね。変えてたら君はこうして僕に掛けることはできなかったんだからね』

『ええ、二度と掛けるつもりは無かったわ。あなたの声も二度と聞きたくなかった』

『ひどいなー。どうだい最近。子守で忙しいかな?』

『あの子達はもう高校生よ』

藍はそっけなく答える。

『ほう、たくましくなったもんだな』

『それより……』

『君は今でも昔みたいに綺麗な』

電話の相手は久しぶりに藍の声を聞けたので心が浮いているようだった。

『いいかしら?』

『はいはい。せっかくの何年かぶりだっていうのに』

『八年』

『あの子の時が最後か、なんて言っただけ、白上彩人、君?』

『本当、あなたは鬱陶しくて憎たらしいわ』

『そうさ。間違っただよ。で。』

電話の相手は一拍おく。

『何があつた？』

先ほどまでの浮かれたトーンも話し方もどこかへ消え去ってしまったかのように、真面目になる。電話越しにぴりぴりとした空気が伝わる。

藍は本当にこいつに話していいものかと躊躇う。昔からどこか食えないところのある男だった。迷っているうちに電話の相手のほうから話を振ってきた。

『ヒンター来訪者のことかな？』

藍はその言葉を聞いて背筋に寒気さむけが走る。

（勘の鋭いやつめ）

相手は大方、こちらの話そうとしてることを読んでいるようなので、包み隠しても無駄だと判断した。

「ええ、そうよ。『あの時』の続きが始まるかもしれないわ」

二章（１） 異常は何処へ

「朝か……学校……面倒くさ……」

一週間の始まりの朝に出た第一声。

彩人^{あやと}は学校をサボりたい気は山々なのだが、そのようなことをしたら後々（藍）が恐ろしいのでそれは許されない。

起きようとして肩までかかっていた掛け布団をばさつとどけた途端に、冷気は容赦なく忍び寄ってきた。

「寒い……」

再び掛け布団を手にとって被り丸くなる。

部屋には暖房器具として電気ストーブが一台ある。これが唯一の暖房器具だ。後は厚着するとか毛布を肩にかけるとかで毎年冬を乗り越える。新代荘の他の面子も例外ではなく、皆このように今年の冬も過ごしている。

電気ストーブのスイッチを入れたまま寝るのは何かしら危険があるといけない（電気代の軽減もある）ので睡眠時は使用禁止というのが新代荘の規則の一つにある。

そのため朝になれば室内は完全に冷気でいっぱいに満たされて、冷蔵庫のようだ。

今日も寒いのだろう、とカーテンの閉まっている窓の方を布団の中に窺いながら見ていた。

このまま布団のぬくもりに包まれているところから、冷気を遮断するベールを取り払ったら、温度差の影響を多大に受けてしまう。

だから彩人は掛け布団を体に巻きながら立ち上がりカーテンを開けに向かう。

カーテンを開けてもぽかぽかとした朝の日差しはやはり拝むことはできなかった。

「今日も晴れないなー」

本日の空に青色なし。

本日も、だ。

灰色に少し薄みがかった感じである。雪は幸いにも降っていない。先週から色見市上空にある雪雲は少しずつ変化していたようだ。何日かすれば、お日様も顔を出すであろう。

外の様子を確認した彩人は時計を見る。時間にあまり余裕は無さそうだった。

藍の部屋へ朝食をとりに行かなければならないので、布団を外して着替えを終えた後、藍の部屋に向かう。

「おはようございまーす。ううつ……寒いっ」

新代荘の各部屋はそれぞれ別の住戸となっている。そのため部屋の移動は必ず一度は外に出なくては行えない。

外の寒気は室内の冷氣に劣ることなく、よりいっそう強烈なものだった。

「遅かったわね。遅刻しても知らないわよ」

彩人が起きてくるのが遅かったので味噌汁が冷めてしまったのを藍は台所で温め直していた。彼はまだちゃんと開かない目をこすり、ふらつきながら丸机のある部屋の奥へと歩いていく。

「あ……」

机の横に布団が敷かれている。

そこには眠っている銀髪白皙の少女。

今、彼女は若葉の服を着ている。

（そう……だったな……）

彼女を見たことで昨日の出来事が脳裏に蘇る。

夢ではなかったのだと。

それは実際にあったこと。

日常ではない——非日常。

それは一夜のことであり、朝はいつも通り。彩人が望んでいる日常である。

藍がお盆の上に朝食を乗せて運んできた。味噌の香りが伝わってくる。

「ルネは、あれからどうですか？」

第一に藍に尋ねておきたいことだった。彩人はそう尋ねつつ、ルネの顔が見える位置に座る。

藍はお盆の上の朝食を丸机の上に並べ終える。

「あなた達が自分の部屋に帰った後に一度目を覚ましたわ」

「本当ですか?!」

今の彩人にとっては何よりの吉報だった。

(あの状態からよくがんばったな)

彩人はルネの方を見て微笑む。

「ほらその子を見てにやけている場合じゃないでしょう?」

「にやけてないっ!」

「さっさと学校行きなさい」

「今日学校、あるの? 昨日あれだけ雪降ってて」

「なに馬鹿な事を言っているの? 幸祐も若葉も部活の朝練習で六時くらいにはもう出て行ったのよ。あんたも見習いなさい」

部屋の隅にある箒笥たんすの上に置かれた時計は七時を三十分を過ぎていた。

彩人は学校の事などはどうでもいいから彼女のことを色々と聞きたかった。

「この子が起きた時どう?」

「起きたのはあなたたちが部屋に帰った後、そうね……十二時は過ぎていたわね。様子は……ぼーっとしてた」

「ぼーっと、って……」

それは彩人を少し不安にさせるような発言だった。

「とりあえず何か食べさせた方がいいと思ったから、鍋の残りもちやんと食べさせたわ。まあその後すぐ寝ちゃったけど」

「なにか言ってた?」

「とくに何も。聞く暇もなかったし」

「そう……」

(まだ本調子じゃないのかな?)

藍の口元が少し上がる。

「なに？ やっぱりその気があるわけ？」

くすくす、と藍が微笑を浮かべる。

「そういうわけじゃないって！」

「ふふ、まあいいわ。そんなことよりさっさと食べちゃって。洗い物するから」

彩人は朝食を口の中へ急いで掻き込んで、ささっと済ませ学校へ行く支度する。

「じゃあ、ルネをお願い」

「はいはい、任せておきなさい。いつてらっしゃい」

藍はしつしと追い払う仕草で、ルネを気にしてばかりいてぐずぐずしている彩人を新代荘から追い出す。

そして追い出された彩人は気乗りせずに登校している。

昨日嫌と言うほど夕方まで降り続けていた雪は道路に積もっている。道の真ん中は車が通ったりして積もった雪が削り取られ、タイヤ痕が残っている。道の脇にある水路の近くはそのままの状態だった。

（ルネ、大丈夫でよかった……）

想像の世界だけで起こるような出来事が終わった後、ルネの体は昨日、氷のように冷たかった。本当に命が危険だったかもしれない。彩人は新代荘を出る前に彼女の手を優しく握ってみた。その時にはちゃんと人の温かさが伝わってきた。そのおかげで不安は一先ず消え去った。

彩人たちが通っている高校——帆布南高校はごく普通の公立高校だ。一応進学校ではあるがレベルの高い大学を目指せとまでは、勉強に力を入れているという気は感じられない。彩人にとってはとても過ごしやすい環境であった。

学校までの道のりは新代荘から北東に向かって徒歩二十五分。昨日行ったコンビニといい、どこかへ行こうとするとどうしても時間がかってしまう。さらに交通機関が通っているわけでもない

ので徒歩で移動するしかない。自転車さえあればそんな苦労はないのだろうが、生憎新代荘にはそのようなものを揃える経済的余裕はない。

住宅が建ち並ぶ道を抜けると橋の手前までやってきた。

学校へ行く途中に川が陸地を隔てているので、橋を渡らなければならぬ。この橋を渡ると新代荘周辺のような築五十、六十年といった古い家屋に比べて築二十年未満の比較的新しい住宅街がある。道路も白線できっちり分けられている二車線の車道になる。

川は彩人が歩いてきた道の周りの田のように凍ってはいない。滔々と流れる水はいかにも触っただけで手がその冷たさで痛くなりそうだった。

橋からは家々が建っているところより高い土地になっており、普段は違うのだがどの建物も白い屋根だった。

橋を渡り終わると新代荘が建てられた地域より新しい住宅街に差し掛かる。その中を進んでいくと店も見かけるようになってくる。ランドセルを背負った子供たちが集団で登校しているのも見かける。

「ガキだなー」

三人の小学生が雪球を作って投げ合っていた。

対して大人たちは雪かきで大変そうだ。家の駐車場や車の上に乗った雪をせっせと下ろしている。その駐車場の傍らには、一メートルはあるだろうか、雪だるまが作ってある。

「そっかいや今年はまだ作ってなかったか」

数日降り続けた雪は降っていた期間と同じくらい溶けるまでは時間がかかりそうなのでまだまだ間に合う。

空はまだ青空を見せる様子はない。空一面に灰色の膜が覆っている。

そんな晴れない空を見ても仕方がない、というよりは、彩人はルネと名乗った少女のことばかりを気にして歩き続けていた。

「何者なのだろう……」

帰ったら聞いてみるか、とまだ登校している途中だと言うのに、早く学校が終わりと思いつけている矢先のことだった。

「彩人おおおおおおおおおお」

唐突に大声で自分の名前を呼ぶ声。

「？」

彩人は呼ばれた方を振り向いた。

「ぐはっ！」

彩人は振り向いた瞬間、顔面に痛みと冷たさが染み渡る。

何だよ、と心の中で愚痴を言いながら顔についた雪を払う。

「ほれ、どうしたそんな暗い顔して！ もう一発いくぞ！」

目を開けると自分目掛けて雪球が飛んできていた。

「おっと」

それを横飛びして避ける。

路面は凍っていてとても滑りやすくなっていた。

「しまっ……！」

彩人は足を滑らせて完全にバランスを失い、不覚にも転倒。

「くっそう……」

人がよく通る歩道を歩いていたのでふわふわな雪は積もっておらず、クッションのように働いてくれなかった。

「ふん、どうだ」

尻をさすりながら地べたに座っている彩人を、腕を組み俯瞰している人物は、雪球を片手に持っていた。

先ほどの無邪気な小学生たちではない。彩人と同じ制服を着た高校生だ。

「ノツキー、てめえ何しやがる……」

彩人に呼ばれたノツキーと称された高校生男子はニヤニヤと笑みを浮かべている。

「いやあ、なんか彩人がぼーっとして歩いてるからな、ついぶつけたくなっちゃった」

本名、波瀬^{はせ}乃樹。

彩人と同じく南帆布高等学校に通う生徒で彩人のクラスメイトでもある。彩人とは中学校の時から付き合いで、今彩人が歩いている住宅街に住んでいる。やんちゃな小学生のような面影を感じさせられるが彩人よりは少し背が高い。

「顔面ヒットしたんだぞ！」

「それはすまなかつたな」

棒読みで誤る。これは昨日、藍に同じようなことをやられたばかりだ。

「覚悟しろっ！」

彩人はひそかに後ろで作っていた雪球を乃樹に向かって投げつける。

だが。

「フツ、甘いな」

乃樹は一步後ろに下がり、悠々と雪球を避ける。雪球は何も無いところへ飛んで行く。そしてその場に彩人を置いて学校の方へ歩き出した。

「逃げるのか！」

「仕返しをしたければ追いついてみる」

乃樹は尻を叩き彩人を挑発する。

彩人が立ち上がると同時に乃樹も走り出した。

「待てや！ このやろう！」

雪球二個分の雪を確保して、作りながら走る。その間も乃樹は逃げ続ける。

右手にある雪球を投げつけた。

前方を走っている乃樹はそれを避けて先ほどの彩人と同様、滑つて転倒。彩人はそれを見逃さず、顔面目掛けてもう一方の雪球をぶつける。もちろん顔面目掛けて。

目には目を齒には齒を、である。

そういうことで、これにて仕返し完了。

しかしその後も乃樹が再び攻撃し出したので、彩人も反撃し、と

いう小学生たちと同じことを数分間続けていた。

二人とも体を動かしたため、体は温まっていた。度を超して汗ま
で掻いてしまっているが。

今は二人の同意で休戦状態になり、普通に大人しく、高校生らし
く登校している。

「あ、そういえばさ……」

乃樹が先に話を切り出した。走り回っていたせいで息が切れてし
まっている。

「なんだよ……」

「噂で聞いたんだが昨日、火事があったの知ってるか？」

「……」

彩人は瞬時にわかった。

知っている。

知っていて当然だ。何せその事件の関係者なのだから。

「へ、へえ……」

「でさあ、その火事がさあ、あの向こうの方の雑木林で起こったらし
いんよ。それが結構でかくてさ、雑 木林にぽっかりと空いた木
々も何も無い場所がでちまつたらしい」

乃樹はそう言っただけで昨日彩人がコンビ二へ行く途中に通った方向を
指差す。

ドンピシャだった。

「けっこう近いんだな……」

「例の放火の件じゃないかって言われてる。そんな人がめったに立
ち寄らない場所で炎が出るわけがないだろう？ だから放火だろう
ってさ、恐いよな」。例の不審者と同一人物なのかね」

「さ、さあ……」

彩人は知らないふりをし続ける。自分が関わっているなどとうて
い言えないからである。

（そんな放火なんていう軽いもんじゃないぞ？ ただの放火魔じゃ
ないからな。手から炎出しよった。あんな奴は人間じゃな……いや、

これはいいや)

「捕まるといいよな、犯人。意外と大事みたいで警察も色々と動いてるらしい。火を放っただけじゃなくて、その火事では爆発もあったみたいなんだよ」

爆発。

彩人の肩がびくつ、と敏感に反応する。

「爆発物まで持ち歩いてるとか、放火魔から爆弾魔にランクアップだぞ」

乃樹は噂話を続ける。

彩人は心配していた。

(え……何かこれやばい？ 爆発物って俺があの時投げたガスボンベのことじゃないか？ もしそうだったとしたら、その爆弾魔って俺になっちゃうじゃねえか！ いや……でも、よく考える、俺。炎を使っていたのはあの男のほうだったし、もとはといえばあちら側に問題があるわけであって……俺に責任はない。そう自己防衛だ！俺は悪くない。警察に捕まることなんて……あるはずが……)

「おい、彩人大丈夫か？ 顔色が悪いぞ？」

彩人がずつとうつむいて一言もしゃべらないので、乃樹が心配になって、ひよつとしたら体調が悪いのか、などと思っていた。

「ご、ごめんなさい！ それだけは勘弁してくださいっ！」

彩人は乃樹に土下座ポーズをとっていた。さらに両手を差し出していた。

「お前……どうした？」

乃樹はそのような彩人の姿を見て一歩後ずさりしていた。

(え？)

ようやく彩人の頭が状況に追いついた。

「うおおおおお！ 俺なにしてたんだあああ！」

「彩人、どこだ、どこが悪いんだ？ 頭か？ そうか頭なんだな？」

よし俺が一発、お前が正気に戻ることを祈って拳を叩き込む！

戻ってこい彩人おおお！」

「正気だ！ あほが！」

乃樹が拳を振ろうとしたところへ彩人のカウンターが炸裂。
カウンターは腹部へ。

「ぐっはっ」

乃樹が腹を押さえて蹲る。

「く……よかった……正気のように……だ……な……」

「あ、ごめん……」

彩人は正直、ここまで強く力を入れたつもりはなかったのだが運悪くいい具合（この場合は悪い具合の方が正しい）に決まってしまうたらしかった。

まだ学校に辿り着いてはいなかったが、学校のある方角から予鈴が聞こえてきた。

予鈴の五分後に鳴る本鈴に間に合わなければ遅刻となる。

現状、乃樹が負傷中。

いつもなら構わず置いていくのだが、今回は自分に原因があると思っただけは止めにした。

彩人は乃樹に肩を貸して、二人は学校へ行った。
もちろん二人とも遅刻だった。



その日の授業は教室移動の必要のないものばかりが集まっていたため、朝来てから席を一度も離れていない。

彩人の席は窓側、教室の後ろから二番目に位置している。

そこからはグラウンドが見え、体育の授業で寒い中、上は体操着一枚、下は膝までの丈のズボンといった格好で生徒たちが走っていた。

彩人は、数学教師がチョーク片手に黒板を数式で埋め尽くしている最中、ぼんやりと窓の外を見続ける。

決してグラウンドを走っている女子を見ているわけではない。

「なあなあ、雨ちゃん」

彩人の後ろの席に座る乃樹が先生に気付かれないようにひっそりと隣の席に座る雨夜（あまや『あめ雨ちゃん』という愛称は乃樹が命名）に話しかける。

「ん？ どうしたノツキー」

雨夜は小首をかしげながら乃樹と同様に小声で聞き返す。

「どう思う？」

乃樹はこれこれと、ずっと窓を見続けている彩人を指差す。

「？」

雨夜の首がさらに右へ傾く。彼女の最大の特徴であるといえる、末端をゴムで縛られた長いサイドテールが床についてしまいそうなほどだ。

雨夜は彩人の方を見る。

「駄目だねー、彩とん、体育の授業をしている女の子に気を取られるなんて」

「いやそうじゃなくってさ」

「？」

またサイドテールが地面に付きそうになる。

「今日なんか、様子がおかしくねえ？」

「ああ、確かにそんな感じするねえ」

「朝っぱらから何か暗いつていうか……考え事してる感じだった」
「そうだね……」

ふむふむ、と顎に手を当て考える。

「最近、彩とんの周囲で変化は？」

「変わったことか……んー、いつも通りでぐーたらしてるなー。あ
っ！」

乃樹が大声を出してしまった。

「しー」

雨夜が人差し指を立てる。

「チョークを持つ手を止めた数学教師が「どうかしたか？」とやか

ましいという意味をこめた上で言ってきたのを、乃樹は「消しゴムを落しました」と言ってやり過ごす。

「で、変化って？」

「先週の金曜日のことなんだけど、これがな……」

「なにになに？」

「掃除を真面目にやってたんだよ、こいつ。すごくね？」

雨夜の目が半目になる。

「なーんだ……」

「あれ？　そういうことじゃないのか？」

「ノツキーは鈍感だなー、もう。そうじゃなくってさ、あれはズバリ」

「ズバリ？」

「恋、だね」

探偵っぽく決めようとした風に言う。得意げな顔で白い歯がチラリと見え、Vの字に開かれた親指と人差し指が顎に当てられている。

「さいですか……」

今度は乃樹が半目になる。

「春の到来だ！」

うんうん、と納得したように雨夜は頷く。

「それは……あるのかねー。こんな窓の外みたいに冬真っ盛りだと思っけどなー。一緒に住んでる若葉ちゃんも幸祐の方に気があるんだろっし」

乃樹は中学時代から彩人の周りで好きな人とかの噂が全く立ってはいなかったのを思い出す。

「あの二人付き合ってるのか、付き合っていないのか未だにはつきりしないよね、まったく。というかその話は置いておいてー、あれ？　あまりその気はしない？　私は恋わずらいで間違いないと思ったんだけどなー。窓の外を見ながら、『寒々しい景色だなー』とかで自分の気持ちとのギャップ差に落ち込んでいるんだよ。ギャップ萌え！」

「いや、ギャップ萌えって意味わかんないし」

「彩とんは多分心の中で『フッ、そうか……どうやら俺の方が来るのが少しばかり早かったよう、だな。恨むなら気温を上げようとせず雪ばかり降らせる天にしな（キラッ）。』とか、そんなふうに思っちゃってるんだよー」

「そんな彩人……きもいな」

「うん……ま、まあノリと言っやつだよ。実際にそんなことを言う彩とんを見たら、爆笑か白^しけるかのどっちかだよ」

彩人の様子がいつもと違うことに乃樹と雨夜は、様々な想像を膨らませて二人で盛り上がっていた。その会話をしているうちに刻々と時間は過ぎてゆき、授業終了のチャイムになる。学級長が起立の号令をかけて礼をした後、彩人は着席せずにそのまま、二人のほうを向き。

「勝手な想像すんな」

「あはは、聞こえてましたか……」

乃樹と雨夜はぺこりと小さく頭を下げる。

彩人は教室の外へと出て行こうとする。

「彩人！ どこ行くんだよ！」

乃樹が立ち去る彩人の後姿に尋ねる。

彩人は、トイレだよ、と言って出て行った。

「聞かれちゃってたねー」

あはは、と困った表情の雨夜が乃樹の隣に立つ。

「やつぱり、何かあるな」

「ちよつくら探りいれてみますか？」

内密の企てをする二人であった

二章（２） 白色と銀色は似ている？

彩人はトイレには行かず学校の外庭——木製テーブル、チェアなどが設置されていたりする——に出てきていた。

午前中の授業はこれで終わり。

今は昼休みだ。

普段なら昼食時は教室ではなく外で食べるという生徒もたくさんいるのだが、芝生は一面雪が降り積もったままで寒い中わざわざ暖房のついている教室から出てくる生徒はいない。昼食のためではないが、グラウンドで雪合戦を始める生徒がいる。

「帰っちゃおうかな……」

彩人は午後の授業をサボってしまおうかと思いつていた。

（どうせ授業なんて耳に入らないしな……）

いつもは午後の授業を受けるのが面倒くさいからサボりたいと思うことが多いのだが、今日はいつもと違う感じだった。サボりたいから、というよりは早く新代荘に帰りたい。そればかり朝から思い続けていたのだった。

「でもな……」

こんなにも早く帰ってしまったら新代荘にいる藍に面倒なことをさせられるに決まっていた。

「どうした彩人？　こんなところで」

ふと、後ろから声をかけられる。

「幸祐か」

「窓から見えたから出てきてみた」

「俺は何もしてねえよ」

「帰るなよ」

ギクツ、と肩が動く。

「ルネっていう子は藍さんに任せておけよ」

俺たち、とは若葉のことだろう。

幸祐には何から何までも彩人が思っていることがわかりきっているようだった。

「部活ないんだから俺たちより早く帰れるだろう？」

「……」

「ほら、中に戻るぞ」

すたすたと幸祐は昇降口の方へ歩いていく。

幸祐は彩人を引き止めるためだけに外へ出てきたようだ。

「はあ、仕方ないか……」

彩人はそう一言呟き学校の方へ踵を返す。

（今帰っても起きているとは限らないもんな……）

彩人が教室に帰ると、雨夜と乃樹がひそひそ話をしていた。それを横目で一瞥して通り過ぎ、自分の席に着いてまだ食べていなかった藍お手製弁当を食べた。

午後の授業は一応黒板の前に立つ先生の話をして、あくびをしながら聞いていた。

とても長く感じた午後の授業が全て終了し放課後になる。

部活動に参加していない彩人は教室から出てまっすぐ昇降口へ向かう。その足取りは速かった。いつもならば東にある新代荘とは逆の学校より西の方にふらりとぶらつくのだが、今日はどこにも立ち寄ることなく一直線に新代荘へと帰った。

鞆を持ったまま自分の部屋に向かわずに藍の部屋のドアをあける。

「そんな急がなくてもいいのに……」

藍は鞆を自分の部屋に置いて来ないで部屋に真っ先に入ってきた彩人を見て呟く。そして彩人の目を見て「いいわよ。上がりなさい」と彩人を招き入れた。

「ルネなら今ちようど起きたところよ」

それを聞き、彩人は今すぐにでも走って朝に彼女が寝ていた部屋へ行きたかったが、廊下は一人しか通れない幅で、前方には藍がいるので小股のはや歩きになっていた。

二人は廊下から部屋に出る。

彩人は見た。

ルネはそこにいた。眠ってはいない。二人が入ってくる方向をじつと見ていた。その目は透き通った、淡く、そして澄んだ青い瞳。まるでガラス細工のビー玉のようである。

彩人はその目に吸い込まれそうになった。

今までは眠っていて瞼の裏に隠れていて見えなかった。昨晚、彩人を助けてくれた時も暗くてよく見ることはできなかった。

彩人はその目に見惚れて言葉を発することができなかった。

「このアホみたいな顔をした子がさっき話した白上彩人」

藍はすでに彩人たちの紹介をしていた。

「えっと初めまして……じゃないか。昨日はもう会ってるから……。覚えてる……かな？　昨日俺は君が道端で倒れているのを見つけたんだ、け、ど……」

ルネの綺麗な双眸はまっすぐ彩人の目を見ている。ただ見ているだけ。何も話そうとしない。何を考えているのかわからない。感情があるのかもわからない。ガラスなのは彼女の瞳だけではなかった。彼女そのものがガラスの『結晶』のような。

神秘的、不思議、不気味、一体どれが正しいのかわからない。

「藍さん……」

「ずっとこの様子よ……」

藍は彩人の言いたいことを察して、昨日もこのようにただ無言だった、と続けた。

彩人は藍が朝に言っていた「何も言っていなかった」「ぼーっとしたようすだった」という言葉の意味をここにきて理解した。

（昨日と様子が変わらないか？）

最後に見せたあの笑顔はもう見せてくれないような気がした。

「この子、あなたに任せてもいいかしら……？」

藍が唐突に何の脈絡かわかっていない彩人に頼んだ。

「え……それは……どういう？」

「私はちよつと出かけてくるわ。この部屋にいてくれて構わないか

ら。ごめんね、力に慣れなくて」

藍は、彼女と一番近い位置に立っているのはあなたよ、と肩を叩いて彩人の横から立ち去ってしまった。

「……」

「……」

部屋に残された二人。藍が出て行くときのドアの閉まる音が沈黙の部屋に響く。

彼女は彩人から目を離し、ぼーっと虚空を見つめ始めた。

（俺が一番近い位置に立っているってどういうことだ？ 藍さんは俺にどうしろっていうんだ……）

沈黙を破るために、とりあえず無難な質問をから始める。

「ルネ？ 大丈夫？」

返事は無い。

しばらくルネの様子を見てみると彼女の方から口を開いた。

「——い」

「ごめん、もう一回言ってくれる？」

ルネはとても小さな声でボソリとしか言わなかったので、うまく聞き取ることができなかった。

彼女はもう一度言う。

「……わからない」

と。

「わからないって……」

わからない、その言葉の意味が彩人にはわからない。

だが、わかる。彼女の声が怯えているということは。

「なあ？ わからないっていうのは、どういうことなんだ？ よければ教えてくれないか？ ルネ」

藍はルネの体調は良くなったと言っていた。しかし彼女の様子があまりにも弱々しく、これ以上怯えさせないように優しく尋ねる。

ルネは再び黙ってしまった。

（怯えるのも無理もないか。この子はずっと眠っていたんだ。起き

たら自分の知らない人がそばにいて、さらに今いる場所も全く知らない。周りは知らないことだらけなんだからな……)

「無理はしなくてもいいよ。話したくないなら話さなくてもいいからさ」

だが彩人は心の中で思っていることと正反対のことを口に出している。

彼の本心では本当は真相を知りたがっていた。

わからないのはルネだけではない。彩人もであった。

昨夜、自身の遭遇した事件。

手から炎を出現させて見せたあの男は一体何者か。なぜあの男はこの少女を狙っていたのか。男が出した炎とルネが作った氷の壁、そして後から乱入してきた謎の三人組。これらの超常現象はどうしたら説明がつくのか。

今日学校でもずつと気になって仕方がなかった。もし首を突っ込んでしまったら男の言っていたあちら側の世界に入り込んでしまう。入り込んでしまったらどうなるか。そんなことわかるはずがない。ただ良いことがあるなんてことは一度たりとも思わなかった。何せ命を狙われたのだから。子供同士のおふざけや喧嘩とはわけが違う。だから関わってはいけないと思い、それら全てを忘れてしまおうと一度は決めた。けれどもそれはどうしても忘れることができず、昨夜の出来事は脳裏にしっかりと焼き付けられてしまっていた。

(この子はあちら側の世界にいるのか……。なにが一番近いに立っている、だ。俺はこの子のために何もできないじゃないか……)

彩人は自分の無力さに嫌気が差し、ルネも今はそつとしておいた方がいいのかもしれないと思って、もう自分の部屋に戻ろうと思い立った時。

「ルネ……」

ようやくルネは勇気を振り絞り他者に告げた。彼女は掛け布団を両方の手で強く握っていた。

「ん？」

「ルネって――」

「――なに？」

なに？

その問いが何を意図するのか……。

「ルネ。それはどうい――」

（待てよ……）

彩人は思考を巡らせる。

この反応は知っている。彩人もかつて自分の名前を呼ばれて同じ反応をしたことがある。

（そうだ……これは――）

「記憶……喪失……」

「おい……ルネ？ お前の名前はルネだ。そして俺の名前は彩人だ。わかるか？」

「わたしの……名前……」

彩人の予想は残念なことに当たっていた。

「なんで……どうして……」

昨日の今日で自分の名前さえ忘れてしまった。彼にはその理由が全くわからない。

だが紛れも無い事実。

「わからない……わからないよ……」

ルネは首を振って彩人のほうを見る。その目は救いを求めている目だ。

彼女の雪のように白く綺麗な手が彩人の服の裾を掴む。

「あなたは誰？ わたしを知っているの？」

彼女は混乱している。

「ねえ？」

彼女は問うことをやめない。

「ねえ……何か答えてよ……」

雪が溶け出すように目元に涙が溜まっていく。
それを見て彩人はようやく気付いた。

（違っだろう。俺が混乱していてどうする！）

そして藍がここを出て行く前に言った言葉を思い出す。

（そうか……）

「それで藍さんは俺にこの子を……」

記憶を失くした少女は助けを求めている。

記憶が無いという恐怖から。

そして彼女を理解し救うことができるのは同じ境遇を味わったことのある人物。

藍さんはそう思って俺にこの娘を任せたんだ、と彩人は思った。

「俺は……君を知っている……」

「ほん……とう？」

「ああ、少しだけだが」

彼女と会ったのは昨日が初めてであるが、彩人はルネを一先ず安心させることが重要だと考えた。そしてルネが落ち着き始めたところで話を進めることにする。

「君がどのくらい覚えてるか教えてくれないか？　少しでもいい断片でも。何か覚えていることはないかな？」

彼女に残された記憶を探る。何かあればそれは彼女自身が記憶を取り戻すきっかけになるかもしれないからだ。

「……覚えていること？」

（思い出させてやりたい）

「そうだ。何でもいい。たとえば……『風景』とか『人物』とか自分のことじゃないものでも何でもいいから！」

（ルネに俺と同じ苦しみは味わって欲しくない）

「え、えっ……と」

ルネが言葉を詰まらせる。

彩人は必死になってしまっていたので気がつかなかった。彼の手は少女の華奢な肩をしっかりと掴んでいた。そして顔も目と鼻の先に……。

「ご、ごめん！」

咄嗟に彼女から手を放す。

（しまった……）

彩人は、恐がらせてしまったか、と内心不安だらけ。ここからどうつなげればいいのか困ってしまう。手が宙を漂う。

「……。ちよつとだけ覚えてる……」

「ほ。本当か？！」

ルネが返事を返してくれたことと、覚えていることがあるという、二つのことで彩人は安心すると同時にとうれしさが表情ににじみ出る。

「どんななの？」

「暗かった」

「暗かった？」

ルネは頷く。

「暗かった。でも、明るくて……暖かった」

「暖かった？」

「どういふことなのかはよくわからないの。でも黒か白しか無いところだった。なぜか、その時のことを思い出すと心が落ち着くような気がする。暖かい。」

「白と黒。暖かい、か……」

（白……白い物。暗くて……）

彩人は一つ思い当たることがあり、立ち上がる。彼が立ち上がるとルネも見上げる形で彼を目で追う。

（もしかして……）

向かう先は窓。そしてカーテンを開けてルネにそれを見せる。

「白い物っていうのは『これ』のことじゃないか？」

冬なので五時ぐらいでもちようどいいだろう。

そこには闇の中に白い粉が降り、そして積もっていた。

「そう……かもしれない」

ルネの反応を確認し終えて、彩人はカーテンを閉めて彼女の傍にまた座り込む。

（おそらく、これは昨日のことではないだろうか？ できればそれ以前のことも何か覚えているといいのだが）

「そう、か。じゃあ他に。それより前のことは覚えていないか？」

ルネは考え込む。

必死に何かを思い出そうとしているのだろうが表情は曇ってしまった。

「よく思い出せない……」

彩人は自分と出会う以前のことを聞き出そうと思ったのだが、思うようにはいかせてくれなかった。

（昨夜以前の記憶が全部消え去っているのか……）

それはかなりの障害だった。

彩人が彼女と出会ったのは昨日だ。これでは、彼女がどこからきたのか、何者なのかさえわからない。

（聞くべきなのだろうか……）

知ってしまったえば自分も今いる側の世界から離れてしまうかも知れない。でも、彼女のことがかかるなら、何かの手がかりが手に入るなら。

（俺は聞くべきだ）

踏み込んではいけないような一線を彼は跨ぐと決心した。

「なあ？」

「炎と氷、覚えているか？」

彩人が尋ねたのはあの男とおそらくルネもいる、あちら側の世界のことだった。異常。普通では考えられないような、まさに存在するはずがない空想の中だけの、小説の中とかに出てくる魔法のよう

な力。

「炎？ 氷？」

「見た憶えは無いか？」

ルネからよい反応は得られなかった。

「そうか……」

彩人にとつて衝撃的だったあの光景ならばルネも覚えているのではないか、という期待に託してみたのだがこれも失敗。

（まだだ……）

だが彼はまだ諦めない。

（あの魔法のような力は必ず『ルネ』という人が何者なのかということ を明らかにする手がかりであることは間違いないはずだ）

「俺は今から昨日の夜あったことを全て話す。だからなにか思い出 すことがあつたら言ってくれ」

「うん……、あ、でもその前に一ついい？」

ルネは優しく問いかけた。

「さっき言っていた『ルネ』というのは……わたしの名前だったよね？」

「あ、ああそうだよ」

それは彩人がルネという人物について知っている唯一、確信性の もてることだった。

「君が自分でそう名乗っていたから間違いない……と思うよ？」

「じゃあ、これから私のことを『ルネ』って呼んで」

「え？」

ルネは、だつて、と言い。

「私のことをその名前で呼ばないようにしていたでしょ？」

彩人はルネに心を見透かされた気がした。

「私が『ルネ』だとしても、その名前で呼ばれたところで私にはその 実感がないから……。えっと……『あーと』だったっけ？ あな たはそれを気遣ってくれたんじゃないの？」

「あ……うん。まあそんな感じだ……。つと。ところで『あーと』っ

てなんのこと？」

「あなたの名前」

「『彩人』ですが……」

「ご、ごめん！」

「おお……！ 気にしないでいいって」

彩人はルネとの間の壁が溶けていくのを感じる。

美しくも、氷のように冷たく、ガラスの置物のようだったルネは、今はもうそのようなことを思わせなくなっていた。

「さて……」

彩人は昨夜の一抹を語る。

「初めに謝っておかなければいけないんだけど……さっき俺はルネを知っているって言ったけど実は、出会ったのは昨日の夜なんだ。変に期待させてしまっていたら、ごめん。」

「……いいよ。続けて」

「ありがとう。俺が細道を歩いている時、ルネをはじめて見た時だ。ルネは雪が降っている寒い中を一人で歩いていて、俺とすれ違った時に突然倒れそうになった。そのところを俺が受け止めたというのが、最初だな。その時、俺は声を掛けたけど君は返事を返すこともできない状態だった」

炎を操った男が焼き付けたかのように、脳裏に鮮明に残されているあの出来事を、フィルムを再生していくがごとく思い出していく。「俺はルネを新代荘、えつと……今いるこの場所に連れて来ようとしたんだ」

「……ルネを助けてくれた？」

「ま、まあそうなる……かな？」

「ありがとう」

ルネが笑顔を見せる。今までずっと悲しげな目をしていたのが全て飛んだわけではないが、それでも今までの表情より断然良い表情となっている。

「ど、どう……いたしまして」

彩人はその笑顔を見てうれしさとともに恥ずかしさを感じ、目を少し逸らし指で頬を搔いてしまう。

「さ、さあ続けよう」

（この先はあの男と遭遇したところだ。もう迷ったりはしない）

「俺がルネを負ぶって走っている途中で一度目を覚ましたんだ。だけれどその時のことなんだけど……君のことを狙っている人が現れた」

ルネの表情が曇る。だがこれも彩人も覚悟していたことだ。少々不安にさせたとしても、やはり何かを思い出させてやりたい気持ちが入り込んだ。話すちゃんと一度決断したことなのだから曲げるわけにはいかない。

「恐いかもしれないけど、お願いだ。聞いてくれ」

彩人は、これで少しは恐怖が弱まれば、とルネの手を握る。頼れるものがあれば安心感を与えることができる。彼女の小さな手も彩人の手を握り返す。安心感にかわる肌のぬくもりが伝わる。

「その男の目的はおそらくルネを捕まえることだったと思う。目的とか、捕まえた後どうするかはわからないけど」

ルネの手が彩人の手を強く握る。

「これは馬鹿馬鹿しいことだと思うかもしれないけど、ここで訊きたいことがある。ルネは魔法みたいな不思議な力はあるのか？」

「ま、ほ、う？」

（駄目か……）

「ルネを追っていた男について話そう。男はその魔法みたいな不思議な力を使っていたんだ。炎を何も無い手から生み出して、それを自在に操ることができた。信じられないかもしれないけど事実なんだ。

男はその炎を使って俺たちを襲ってきた」

「炎……」

「でもその男だけじゃない。ルネも同じような力を使っていた」

「ルネが？」

「ルネは氷を操っていた。君にもその男と同じように何か不思議な力を使えるらしい」

「氷……。ルネはそんなの知らない。できないよ。怖い……」
手の締め付けがまた強くなる。

「でもその力のおかげで俺は助かった」
「え？」

男が彩人に炎を振りかざした時、普通なら絶対に焼き殺されていただろう。彼がこうしてここにいるのもルネが不思議な力を使って氷壁で守ってくれたおかげだ。

「ルネがその力を使ってくれなかった俺は今頃灰になっていただろうな。だから覚えてないと思うけど、ルネは俺の命の恩人だよ」

ルネの顔がやや驚きに満ちた後、うれしげな顔になりかけたその

時

「うつ……！」

彼女の手が彩人の手から離れ彼女の頭に当てられる。

「大丈夫か?!」

「大丈夫……少し頭が……。何か思い出しそうだったのに……」

「無理に思い出そうとしちゃ駄目だ」

急なことで彩人も戸惑う。

「もう一度横になった方がいいかな？」

「大丈夫だから……続けて……」

でも、と彩人が言うのをルネは押しとどめる。

「……わかった」

次は男が言っていたことについてだ。

「ここらへんは俺もよくわからないんだけど。あの男は世界の異常とか、自分とルネのことをたしか改変者^{アルター}って言ってた……。何か思い当たることないかな？」

ルネの頭はなかなか縦に頷かない。

彩人はかたつぱしから手当たり次第に手がかりを探ってみたが、良い結果は得られなかった。

「そうか……」

「ごめんね……手伝ってくれてるのに何も思い出さなくて……」
「いいや。誤るのは俺の方だ。結局、俺はルネのためにはなにもできなくて……」

彩人は奥歯をかみ締める。

「ううん」

ルネは自分を責め立てる彩人に責任は無いと、彩人の言う事を否定する。

「いいの……。ありがとう。だって、彩人はルネを助けてくれた。それはルネが感謝することだよ？」

「俺は君を助けることはできていない」

（ただあの時、俺がルネに助けられただけなんだ！）

彩人の膝の上に置いたこぶしに力が入る。

「どうして？　なんでそんなに必死になっってくれるの？　ルネと彩人は会ったばかりなんですよ？」

ルネには自分にここまで世話をやく理由に見当がつかなかった。

「君が俺と似ているからだよ」

彼はそう答えた。

「同じ？」

「ああ……。俺も八年前に記憶を無くした。そしてルネと同じようにそれ以前のことは思い出すことができない。名前もね。でも今の名前は記憶を無くす以前と合っているらしい。俺が目覚めた時には藍さんがいて、名前を覚えてくれた……」

この話を知っているのは新代荘の藍、幸祐、若葉、それと乃樹や雨夜ぐらいの親しい友人くらいである。

彩人の目は現在ではなく過去を見ていた。八年前の記憶を無くしたときの自分。その時の境遇と似たルネを見てどのようなだったか、思い出すことができた。

「その時、俺も恐かった」

当時の感情がこみ上げてくる。

「そう……だったんだ……」

ぐうー。

腹の虫が鳴る音。

その出所はルネのお腹だった。

「ふっ、お腹空いたか？」

「うん……」

ルネは掛け布団で顔を隠して小さくなる。

「藍さん遅いなー」

時計の短針の先は六に向けられていた。まどの外も彩人が新代荘に帰った時よりもずいぶん暗くなっている。

「ごめん、藍さんが帰ってくるまでもうちょっと待って」

「ありがとう……」

「？」

「あなたのおかげで恐なくなっただけがする。ずっと記憶を無くしたままのあなたに比べたら私は……このくらいでへこたれていたなら駄目だね」

ルネの顔には幾度か笑みがこぼれるようになってきた。彼女の透き通った声ももう震えていない。

「君は――」

ガチャリ、とドアの開く音がした。

「帰ってきたかな？」

ドアから部屋に続く通路の方を見る。

「どう？」

と、廊下の方から藍の声が彩人の耳に届く。

藍は買い物袋を両手に持って現れ、部屋に居た二人の様子を見ると「うまくいったようね」と小声で呟いた。

「元気になったルネちゃん？」

「あ、えっと……昨日はごめんなさい」

「いいの、いいの。私の名前は新代藍。藍って呼んでくれて構わないわ」

「藍。昨日はありがとう」

（どういうことだ？）

謎のルネと藍のやり取りを見つめる彩人。

「鍋のことよ」

「ああ、それが」

彼は残しておいた鍋をルネが食べたと言っていたのを思い出して納得した。

その時ルネが立ち上がった。

「もう起き上がって大丈夫なの？」

「うん、もう大丈夫」

そう言い、彩人と藍の横を通り過ぎる。

「どうしたの？」

「ルネのために二人ともありがとう」

ルネは二人と反対の方向——玄関の方向へ足を進める。

「お、おい、ルネ！どこ行くんだよ？」

「もう私は行かなくちゃ。これ以上迷惑かけられないし」

「どうしてだよ」

「え？」

「行くあてがあるのか？」

口を閉じたままのルネ。記憶を失くした彼女が行くあてなどどこにも無かった。

「それは……」

なにか言おうとしても返答が見つからない。

その様子を見た彩人はとるまでもない確認をとった。

「藍さん、いいですよね？」

「もちろん」

彩人と藍は確認する内容を話す必要なく伝え合う。

ルネは何のことかさっぱりわからず、二人の顔を交互に見る。

「？」

「ルネ、行くあてが無いんだろう？」

「……」

「無いのよね」

「……うん」

「だったら――」

新代荘は、藍が彩人、若葉、幸祐の面倒を見るためにあるようなものだ。彼らはそれぞれの事情を抱えている。ここではそのような四人が集まって家族のように暮らしてきた。

そして今、もう一人、事情を抱えた者がここにいる。

ルネ。

記憶を無くし行き場を無くした少女。

彼女も彩人たちと変わらない。

だから。

「ここに残らないか？」

受け入れる。

彼らのような者達のためにある。それが新代荘の役割。

「でも……」

「別に迷惑なんかじゃないさ。むしろ家族が一人増えるようなものだよ」

「家族……」

「そう、俺とか、まだ帰ってきてはいないけど幸祐と若葉も。俺たちは居候さ。藍さんにもう何年もお世話になっている」

「そうよー。あんた達を育てるの大変だったんだから。今更、もう一人増えたところで苦労はしないわよ」

「だからさ、行く当てもないのにどっか行っちゃうぐらいならここ

に残って欲しい。記憶が戻るまでもいいから」

「いい……の？」

「もちろん」

「ええ」

本人が望むのなら断る必要は彼らには決して無い。

ルネは踵^{きびす}を返し——向かった先は。

「じゃ、じゃあ……よろしく……」

ルネはそう言い残し布団を頭から被ってしまった。

彩人と藍は互いに見合わせ、同じ表情を作る。

「相当、恥ずかしがり屋さんなのかもしれないわね。そうね……部屋は彩人、あんたの隣の部屋をこの恥ずかしがり屋さんの部屋にしましょう」

彩人は「二階に俺が一人ぼっちになることがなくなった！」と一人で内心、今まで密かに感じていた孤独感からの解消に喜ぶ。

だがそれよりもこの新代荘の皆にとって喜ばしいこと。

新しい家族の一員。

二月十三日、新代荘に新しい住人が加わった。

二章（3）　〇〇五号室

六時過ぎ、幸祐こうすけと若葉わかばが部活を終えて帰宅した。

「よろしくねー、ルネちゃん」

「う、うん……」

若葉は「かわいいー」とか「髪さらさらー、きれい」などと叫びながらルネを抱きしめたりしていじくり回していた。

対する若葉にいいようにされてしまっているルネの方は激しいスキンシップにどう答えていいものかと困り果てていた。

「俺は幸祐だ。よろしく」

幸祐はルネがその状態のまま自己紹介をし、彼女は目の前で虫が飛び交うのを首を動かして避けるように、若葉を避けて幸祐の姿を見ようとする。

「よ、よろ……しく」

「若葉よ、いい加減にしてやれ」

若葉はいつまでもルネをいじくるのを止めそうにないので、その光景を横で見ていた彩人あやとがルネから若葉を引き剥がして止めに入る。これで残っていた新代荘にいしろそうの住人の自己紹介も終え、夕食に。

「安心しなさい！ 今日ちゃんとガスが点けられるわよ！」

藍あいは昨日の約束をすっかり守り、今日はガスが使えるようになっていた。

「もう！ 今日学校で汗臭くないか、すごい気になってたんだから！」

ガスが使えなかったために昨日は風呂を沸かす事ができなかった。近くに銭湯があるわけでもなく、だからと言って何もせずそのままというのも気が引ける。そういうわけで昨日は、まずタオルを濡らし、電気ストーブの前で十分に温めてから、それで体を拭く、という対処をした。

それで彼らの納得がいくわけがなく、まだ藍を許していない。

「はいはい、その話はもう終わり。夕飯にするわよ」

「今日の夕飯は？」

と、幸祐。

「カップ麺よ。しょうゆ、塩、とんこつ、他にも色々あるわ。焼きそばもあるわよ」

「藍さん、これを買に行ってたんだ……」

藍が夕方に出かけて行ったわけを理解する彩人。

「そうよ、見て、ケース買い」

藍が同じカップ麺がいくつも入ったダンボールの一つを持ち上げる。床には違う種類のカップ麺のダンボールが積んである。

「せっかくルネちゃんが新代荘の新しい一員になったのに、どうして最初の食事がカップ麺なの！ もっと、ぱつと豪華な夕飯にしないとルネちゃんが可愛そうじゃない！」

「そうは言ってもねえ……昨日、鍋だったでしょ？」

「だからって今日は記念日だよ！」

若葉がブーイングを藍にぶつけている。

「じゃあ若葉がどうにかしなさい。錬金術で金でも作ってみなさい。残念ながら今、新代荘には余裕が無いの！」

「ごめんね、ルネちゃん。うちのお母さんがケチで」

「よくわからないけど……そんなに気を使わなくても……」

状況に流されるままのルネ。

「歓迎会は終末にできるようにしてみるから。今週いっぱい夕食はこれで乗り越えましょう！ カップ麺うーく！」

「待って、藍さん？ まさか一週間、ずっとカップ麺？！」

幸祐が「マジで？」という顔をしている。

「……」

「カップ麺？」

「さあ、みんな選ぶわよー」

藍が全種類のカップ麺を丸机に並べていく。

「本当に一週間これで過ごすのか……」

「あたしたち食べ盛りな高校生なんですけど……」

「木曜にあたりから気持ち悪くなって食べれなくなりそうだし、それぞれ嫌な顔しながらカップ麺を選んでいく。」

「そんなにおいしくないの？」

三人の様子を見たルネが眉を顰めて尋ねる。

「まあ、おいしくないわけじゃないんだけどな。カップ麺は初めてか？」

「カップめん……」

「初めてらしいぞ」

幸祐がルネの反応から推測する。

彩人は、彼女が記憶無くしてしまったからだろうかと一瞬思ったが、彼女の容姿を見ると本当に初めてかもしれないと思うのだった。
(外国人っぽいもんな)

各々お好みのカップ麺を手にとってから一つの丸机を五人で囲んで座り、ガスが使えることで沸かせるようになったお湯をカップ麺に注ぎしばし待つ。

「そうか、記憶喪失か……」

彩人はルネが記憶喪失でほとんど何も覚えていないことを幸祐と若葉にも話した。それは彼が二人にも知ってもらっておいた方がよいだろうという判断からだった。

「困ったことがあったら言ってね、ルネちゃん。力になってあげるから！」

「俺たち家族みたいなもんだかたな、気兼ねなく接して構わないぞ」
幸祐も若葉もルネを当たり前のごとく新代荘に招き入れる。

「ほらな？　ちゃんと受け入れてくれるだろ？」

「うん……」

時計を見ていた藍が「そろそろかしらね」と言っただのでルネを交えた初めての夕食へとかかる。

「ルネ？　ご飯を食べる前にはこうして手を合わせて『いただきます』と言って、食べ終わりに『ごちそうさま』って言うのよ」

「いただきます?」

「そうよ。では、食べるとしましょうか」
彼らは、せーの、で合わせて。

いただきます。

と。

「どう? カップ麺はおいしい?」

ルネはしょうゆ味のラーメンを食べていた。他の四人の真似をしようとして麺をすすって食べようとするが、苦戦していた。ちなみに箸が使えなかったので、フォークで食べている。

「ん……」

「うーん、いまいち、かな? お口に合わなかったみたいね……。こつち食べてみる?」

藍が食べていたのはさっぱり系の塩ラーメンであった。買ってあるカップ麺のラーメンの中でも一番くどさを控えたものだ。藍はそれをルネに差し出す。

ルネは若葉に教えられたパスタを食べる時のように麺をフォークに絡ませる食べ方で口に運ぶ。

「こつちのほうが食べやすい……」

「ルネは薄味の方が好みっぽいな」

「となると一週間くらいじゃないか?」

カップ麺は基本、油分が多くてくどいため、ルネにとってカップ麺での生活は厳しいであろうと推測された。

「考えておくわ。ルネ、さっき食べていたのが食べにくかったら交換してもいいのよ」

「でも……」

「遠慮なんていらないの」

「お願いします……」

「それでいいの。だって私たちはもう家族なんだから」

藍が当たり前だと、そのように言った。
家族。

ルネにとってとても安心感を与えてくる言葉だった。
ただ。

家族がどういふものかという知識はある。しかし、いったい自分の
本当の家族はどのようなのだろうか？

ルネにはそれが――わからない。



夕食を終えて、彩人とルネは新代荘二階、『〇〇五号室』に来て
いた。

「いやー、すっからかんだなー」

彩人は部屋の中を見渡す。

部屋を照らす電球が天井に、布団が部屋の中央にあるだけだった。
今まで使われていたのは『〇〇一号室』『〇〇二号室』『〇〇三
号室』『〇〇四号室』の四部屋だけ。よってこの部屋は何年間も放
置状態にあった。しかし、埃だらけでというわけではなかった。

（藍さんが掃除してくれたのか……）

「ルネもこっちこいよ」

何をしていいのかわからないルネは部屋の前で立ち止まっていた。
それを手招きする。

「えっと、なにかから説明したものか……」

彩人とルネがこの部屋に居るのは他でもない。ルネがこれから使
用することとなる部屋の事についてだ。

藍曰く「あんたも同じ二階なんだからこの子が慣れるまで面倒を
見て上げなさい」とのことだった。

（ルネって一体どこの人なんだろうか？ 外見からして完全に俺た
ちとは違う人種だよな）

髪は雪のような銀髪。白い肌。そして透き通った青い瞳。そのど

れもが、彩人や彼以外の新代荘の人々とは全く似ていない。

（でも）

何故か日本語ぺらぺら。

「なんでかなー」

ルネの話す言葉はとても流暢である。日本語を話すことのできる海外の人は単語と単語の間を置きながら「ワタシ、ニホンゴ、スコシ、ハナセル」といったようにガチガチとした日本語になっってしまうが、ルネのものはそれとは違う。流暢でないカタコトな日本語に対して違和感があることが普通であるはずなのに、彼女の場合、流暢過ぎることに対して違和感があるほどだ。

（ルネはカップ麺のことを知らなかったな……。庶民の味を知らないどつかのお嬢様だったりして。あ、そもそもカップ麺がこの国にもあるわけじゃいか）

「まあ、全部教えるか」

彩人は壁に設置された部屋の電気を操作するスイッチの傍に移動する。

ルネの視線は彩人の動きに合わせて壁の方向に動く。

「これ何かわかるか？」

スイッチを指差しながら尋ねるが、ルネは小首をかしげる。

（んー。知らないみたいだな……）

「これはこの部屋の電気のスイッチだ」

「すいっち？」

まだ不振そうな目で彩人の指差す物を見ている。

（スイッチもわからないのか……。まさか、記憶喪失で忘れてしまったのか？）

彩人はしばし考え込む。

自分の体験のことであって少しは記憶喪失の知識があつた。

記憶喪失。正確には健忘と呼ばれる記憶障害の一部になるのだが、様々な種類がある。

彩人の場合は全生活史健忘というのに当てはまる。それは発症以

前の自分に関する記憶を失くしてしまった状態を指す。

またルネの記憶喪失についてはいつ記憶を失くしたかを決定付けることができないが、彩人にはこれと同様だろう、と考えられた。

自身に関する記憶といっても、知識として蓄えられた記憶は含まれない。

そのため何もかもを忘れているわけではなく、言葉の意味、知識としての記憶はそのまま残されていた。もし全てを忘れてしまったら、それはまだ世界を知らない無知な赤子のようなものである。

（ルネは『スイッチ』が存在しない環境に居たってことだろうか。一体どんなところにいたんだ、この女の子は。まあ、ぼちぼち思い出していつてくれればいいことなのだが）

「これは、『スイッチ』と言ってな、この部屋の電気を操作するものだ。ところで電気はわかるか？ この上で明るく光っているこれのエネルギー源みたいなものだが……」

彩人は途中で言葉を断つ。

初めてのものをみて不思議そうに『スイッチ』の方を見ていたルネの目が、今は彩人を睨みつけていたからだ。

「ど、どうした……」

「——にしているの？」

「え？」

「バカにしているの？」

ルネの知識には電気というものはあったようだ。

「いや、バカにしているっていうか……」

彩人は困惑する。

（さすがに電気は知っていたか。これは失礼なことをした）
だが、それよりも。

（ルネも怒ったりするんだな）

数間前の美しいガラスの置物のようだった彼女は、もうすっかり普通の女の子として感情をあらわにしている。彩人には前の彼女が嘘のように感じられた。

「彩人はいくらわたしの知らない物ばかりだからってルネをバカにしすぎてない？　いくらルネに記憶が無いからって、それくらいのこととは知ってるよ」

唇を尖らせてすねた様にそっぽを向く。

「そ、そうか。それは悪かった」

彩人は「ルネはどこから来た人かわからないし」とか言い訳はできなかった。ルネはもう開き直ってしまったように話してはいるが、それが本心とは限らない。新代荘の他の皆に迷惑をかけまいと振舞っているかもしれない。話しの流れがそちらの方向に流れないように、彩人はなるべくルネの記憶を失くす前のことについてはむやみに探らないようにする。それは彩人なりの彼女に対しての気遣いであつた。

（しかし、ますますわからなくなってきたな……）

ルネの記憶を取り戻すための協力は大変な道になりそうだと彩人は頭を悩ませる。

「ま、いつか。この『スイッチ』を押して切り替えると部屋を明るくしている明かりが消える。まあこんな感じに――」

ルネは「消える？」と一度確認を取りたかったのだが彩人が先にスイッチをオフへと切り替えてしまった。

明るかった部屋が一瞬にして、真っ暗になって何も見えなくなる。

「ひゃあっ！」

ルネが、明るかった部屋が急に真っ暗になってしまったことに驚いてしまい、突如短い悲鳴を上げた。それとともに、ドカンと何かが壁にぶつかった音がした。

部屋が真っ暗なので何が起こったのかわからない。

「おい！　どうした！」

彩人は慌てて電気を点けると、ルネは仰向けになっていた。

「おい、大丈夫か！」

そして倒れている彼女を急いで起こしにかかる。

「う……」

「大丈夫か！ 起きろ！」

ルネが電気を消したことで壁にぶつかって、その衝撃で倒れたということを考えるより先に、『彼女がまた倒れてしまった』ことに驚き焦っていた。

彩人が必死で肩をゆする。

パチツと目を開けたルネは「きゃっ！」と今度は明るくなっていることに驚き、勢いよく彩人の体にしがみついた。

「うわっ！」

しかしそれはルネの渾身の頭突きとなったことによって彩人の体が背後に床に叩きつけられる。

「痛っ！」

「うう……」

（何か柔らかいものがっ！）

ルネは強く目をつぶった顔を思いつきり彩人の体に押し付けるとともに、彼女の別の部位も当たって――

ルネは彩人の体にしがみついているが傍から見れば抱きついているように見える。彼女の体温が彩人に直接伝わっていく。

綺麗な銀色の髪が彩人の鼻をくすぐり、鼻がむずむずしたことで彩人は我に返る。

「ル、ルネ、あた、当たって、る！」

彩人は言葉が途切れ途切れにしながらも高鳴る心拍を押さえようとす。

ルネは「ううー」と言いながらまだ彩人にしがみ付いている。

「ああ……しばらくこのままでも……」

（い、いや、だめだ！）

彩人は胸の心底から込みあがってくる欲求を必死で追い払いながら、ルネの体もろとも起きる。

「だ、大丈夫か？」

そつとルネに声をかける。

（なんだろう、すごく残念な気持ちが……）

と、一人心の中で後悔の念に取り憑かれるのだった。

「びっくり……した」

ルネの水晶のような青みがかった瞳には雫が溜まっていた。

「ごめん……まさか抱き————えつと、いや、その……突進してくるまで驚くとは思わなかった」

「だき？ あれ……ルネさっきなにを……」

「えつと、わかった……かな？ あれでこの部屋が暗くなったら明るくするんだけど……」

それに頷いて答えたルネは顔をあげない。

「ルネ？」

彩人は俯いたままのルネを不思議に思い、前髪で隠れた彼女の表情を覗こうすると、彼女は彩人に自分の顔を覗かれる前に彼のいる反対の方向に座っている状態から体を回転させてすぐに立ち上がった。

「な、なんでもにやいつ！」

（あ、噛んだ……）

「なんでもないからね！ その……さっきのは……その……。もういい！ 彩人のバカ！」

「バカ?!」

ルネが目を見開き口を開きながら彩人と目を合わすのを避ける。

（まあバカとは……否定はできないとしても納得しないな。驚いてしまったことに恥ずかしがってるのかな？）

「気にするなつて、いきなりのことだったんだから」

「あ、うん……」

「知らないことが起こったら誰でも驚くつて」

「？」

ルネを見あげていた彩人も立ち上がる。

（やわかったな……。でも、やっぱり、小さかったような……）

彩人がそう思った瞬間、殺気を感じた。ルネの顔を見るとむっとしていた。

「彩人？」

「……はい」

「なにか失礼なこと思わなかった？」

「……。いえ、なにも」

「そう」

彩人の緊張の糸が切れる。

「で、他には？」

「ん？ ああ、わかった。そうだな……」

それから彩人は布団の敷き方、水道の使い方、窓の開け閉めまでこまめに教えていく。そのたびに彩人はルネの不思議そうな目を見ることとなった。

「こっちの扉がトイレで、こっちがお風呂な」

部屋の方の解説は終わらせてその他の場所の解説に入っていた。

そこでルネから困った質問が出てしまう。

「これはなに？」

「この扉が体を洗うのと、あっちの扉が便所だ」

二つの扉のうち手前にはまず洗面所があつてさらに扉を一枚はさんで風呂場があるという構造になっている。

二人で風呂場まで入る。

「これは浴槽、つて見ればわかるよな」

「じゃあこれは？」

ルネが指差したのは蛇口のところについている水栓である。

「ああこれな。三つ付いているから間違えないように気をつけて欲しいんだけど、この赤いラインの入っているのを回すとお湯が出て青いラインの入っているのを回すと冷水が出る。そして最後にこのレバーは蛇口で出すかシャワーで出すかを決める」

三つも操作する部分が付いているのでルネには使うのに困りそうだな、と彩人は思う。

「これを回せばいいんだね？」

ルネがお湯の方の水栓を回そうと手を掛け――。

「ちよつと待った！」

経験があるのではないだろうか。わざとでもなく蛇口を回したときに、それがその蛇口にとつての『回しすぎ』となつて、勢いよく水が予想を上回つて噴出してきたことが。

「？」

彩人がルネの動作を止めにかかったので彼女は後ろを降り向いたが、水栓はすでに開けられていた。

ルネの頭上に容赦なくシャワーからお湯が降り注ぐ。

「え？ ええ！」

頭からルネが濡れていく。

「早く栓を閉めないと！」

あたふたしているルネが水栓を閉めるのを待っていられず、彩人が代わりに閉めに行こうと蛇口の傍にいるルネに近づいたその時。

「しまつ――」

バナナの皮を踏んだときに起こるお決まりと同様に、見事に彩人の右足が濡れた床の上でスリップ。左足で必死にバランスを保とうとするも上半身は既に後ろへ反り、両手が天を仰ぐ。

「彩人！」

彩人が倒れそうになるところでルネが天を仰ぐ彼の右腕をキャッチ。

しかし。ここで彩人の方もルネの腕を掴み返したのがいけなかった。もし彼が彼女の腕を掴んでいなければ、彼女の方が彼の腕をいつでも放すことができたのに。

ルネのほつそりとした外見からもわかるように彼女の体重は軽く、そのため彩人の体を支えられるわけも無く。

「ひゃ！」

彩人に引つ張られるようにしてルネも一緒にバランスを崩す。

「やつほー、様子見に来たよー」

そこでこの『〇〇五号室』の扉が開いた。「どう？ 終わった？」と若葉と幸祐がこの部屋に入ってきたのだった。
（待て！ このままだと嫌な予感しかないぞ！）
彩人の思いはバランスを崩してしまった体の動きを止めることはできない。

ドゴン、と風呂場で音がする。

若葉と幸祐の二人はもちろんその音がした風呂場へと向かうのは必然的だった。

「なに？ 風呂場？」

「っばいな」

そして「来るな！」と彩人が叫んだときには時既に遅し。

風呂場の入り口に立った男女二人は風呂場にいる男女二人を見た。入り口に立つ二人——若葉と幸祐は硬直していた。

風呂場にいる男女二人——彩人とルネとはといえば、彩人が風呂場に大の字で仰向けとなり、その上にルネの体乗る。そこへ、水栓が閉められない限りお湯が出続けるシャワーから永遠とお湯を雨のように降らせていた。

当然のことながら、彼らは二人とも全身ずぶ濡れである。

「彩人」

若葉の声が通常時よりも低い。

殺気に満ち溢れている。

「やつちやつたか……」

幸祐はこれから起こるであろう惨劇から目を逸らすように手で目を覆い隠す。そして静かに部屋から出て行った。

「待て！ 誤解！ 誤解だ！ 誤解です！」

仰向けに倒れている彩人からは若葉を見上げる形になる。

「ルネちゃん大丈夫？」

「いたたたた……。あれ？ 若葉？」

ルネがようやく若葉がいることに気付く。

「うわっ！ びしょびしょ……」

そして、全身が濡れていることも。

「ん？」

さらには、下を見ることで。

「あ、彩人？！」

下敷きにいる人がいることも。

「ルネちゃんはもうそのままシャワー浴びちゃって。で、その間に――」

にこつ、と笑顔をつくる若葉。

「ちよつとこつちに来ようか、彩人くん？」

彼女の言うままに彩人は風呂場から連れだされ（部屋を濡らさない程度に水滴を拭いて、しかし服は水分を吸ったままで）、ルネはそのままシャワーを浴びた。

その間、部屋で彩人と若葉は二人で――以下略。

それが終わって彩人は自室に強制帰還させられた。

そして現在、彩人は自分の部屋にいる。

「あつはははは」

幸祐もそこに居た。一連の話を聞き爆笑中。

「笑いごとじゃねえよ。なんであんなに俺がどうこう制裁を受けなければいけないんだよ……。あれは事故だって」

彩人は『〇〇五号室』から若葉に蹴り飛ばされて追い出された。

外は冬の夜であり、もちろん寒さに満ち溢れていた。それに濡れたままの格好、と追加効果が。

「まあ、大変だったねー。でも絶対に内心で喜んでいただろう？ ウハウハだっただろう」

「……い、いやそんなこは！」

彩人はすぐに否定できなかった。

「しかしなあ……。昨日出会った、というか実質今日会ったとも言える女の子に、もう……。そんな……。このまま大人の階段へと足をかけて……。」

「殴っていいか」

「暴力はだめだぞ。少女誘拐犯」

幸祐はやれやれ、と素振りをする。

「だからルネは俺が連れ去ってきたわけじゃねええええ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8448y/>

転変世界のプラヴィタス

2011年12月1日14時54分発行